

月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.122

クロウvs.《C》！
ついにその正体が明らかに！
創の軌跡 THE MISERABLE SINNERS

王国と帝国、国を担う
2人の新たな決意
英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～

メインストーリー終章がスタート！
『英雄伝説 暁の軌跡』

『軌跡』シリーズ始まりの
物語を振り返る
英雄伝説 空の軌跡

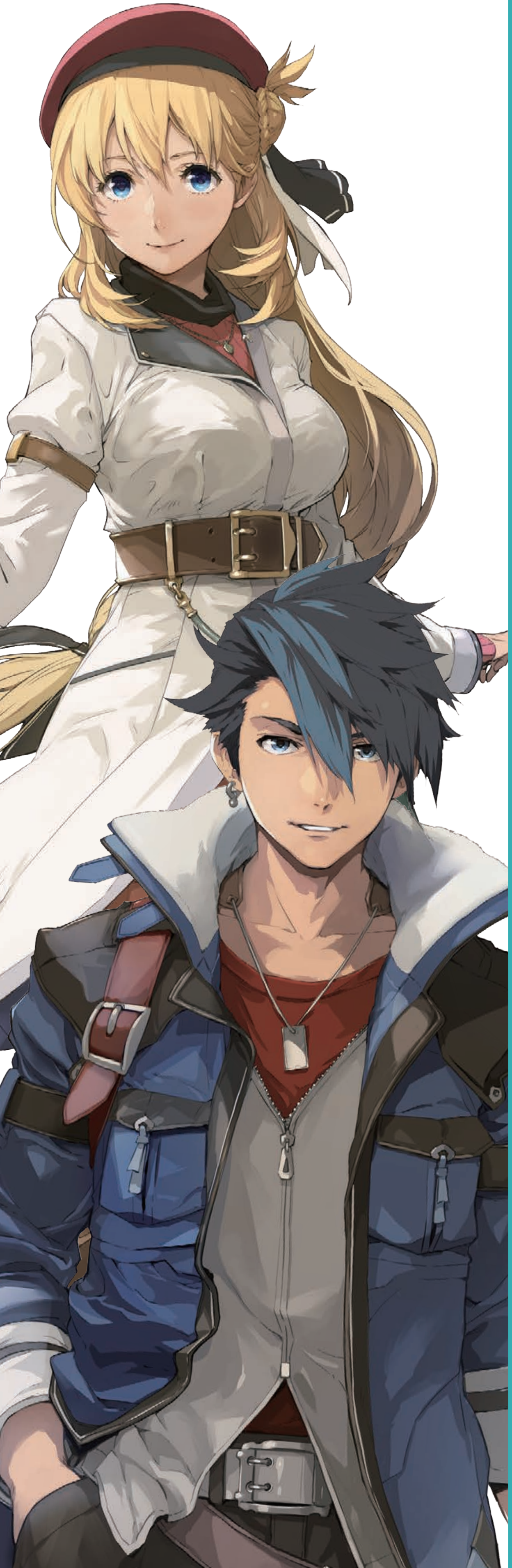
『創』のキャラたちがザナドゥに召喚！
も～っと集まれ！ファルコム学園

ファルコムニュース

祝! 日本ファルコム40周年&ファルマガ10周年!

近藤季洋社長インタビュー

ファルマガ作家陣からコメントも到着！



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

日本ファルコム40周年＆ファルコムマガジン10周年記念



近藤季洋社長インタビュー

3月に創立40周年を迎えた日本ファルコムと、1月に10周年を迎えたファルコムマガジンを記念して、近藤季洋社長にスペシャルインタビューを敢行！　ファルコムマガジンに対する思いから、最新作『英雄伝説 黎の軌跡』最新情報まで、赤裸々に語っていただいた。さらに、これまでファルコムマガジンに連載していただいた作家のみなさんからお祝いのコメントも到着！

—まずは40周年おめでとうございます！　今の率直なお気持ちをお聞かせください。

会社は40周年なんですが僕は20年ちょっとなので、半分ほどしか知らないのですけど、その20数年間でもいろいろなことがあったので、大変長い道のりだったんだなと思います。ただ、いまだに初期のユーザーさんにも遊んでいただいていて、かつ『軌跡』シリーズでは10代20代のユーザーさんにも手にとって頂いて。これだけせっかく長く続いてきたので、この先もますますちゃんと続けて行くためにがんばっていかないといけないなと改めて思いました。

—30周年記念としてスタートしたファルコムマガジンも10周年となりました。

ファルコムマガジンが始まった頃は、まだ社長に就任してそんなに経っていない頃で、いろいろなことが重なった時期でしたね。代表になったこともそうですし、PCからコンシューマーへと舵を切って、さらにマガジンも始まって。収録の時に作家さんと打ち合わせをしたのを強く覚えています（笑）。忙しい時期でしたが印象深い出来事でした。

今でこそタイトルをよく理解してくれるスタッフも多くなり、僕が何もしなくても様々な企画が出てくるようになりましたが、当時は自分でも一生懸命に企画を考えていた時期で、むらさきゆきや先生の小説もそうですし、啄木鳥しんき先生の外伝漫画もそうですね。むらさき先生やさがら梨々先生も作品がTVアニメ化されて、ビッグネームになってしまいましたね（笑）。





—ファルコムブックスで特に印象深い作品やエピソードを教えてください。

先にお話ししましたが、初期は自分も大きく関わっていたこともあり、思い入れがある作品が多いですね。中でもむらさき先生の『英雄伝説 零の軌跡 午後の紅茶にお砂糖を』は、意外なキャラクターを組み合わせていただいて、いまだによく覚えています。「キーアとダドリーで来るかー」という感じですね（笑）。

『ファルコム学園』は言わずもがなですね。『イースvs.空の軌跡 オルタナティブ・サーガ』を僕が企画した時に、シナリオを真面目にやるか、おちゃらけてやるか悩んだ結果、真面目にやることを選んだのですが、新久保だいすけ先生がまんまとギャグ路線を漫画化してくれましたので。それを見て「あーやっぱりギャグ系も良かったな」と思いました。かなり濃い内容なのにアニメ化もされて、すごいですよね（笑）。

—アニメ化と言えば、『閃』のTVアニメ化も発表されました。

あれだけ長い作品なので、アニメ化されるにあたり工夫が必要になってきますので、そこはアニメのスタッフさんとやり取りさせてもらっています。ストレートに物語を描いていくよりは違った切り口で見せていこうという方針で今はお話していますが、まさに現在進行系なので、そこはもう少しお待ちいただければと思います。ゲームでは描かれなかったところを新たに描いてもらいたいという気持ちです。僕たちもそれに伴いアイデア出しはしていますが、どのような作品になるのか楽しみですね。

――この10年はCSに本格参戦したことを筆頭に、大きく変化した遂げた10年だと思います。特にこの10年を振り返ってみていかがでしょうか。

基本的に自分たちはあまり変わってないのかなと思っています。一作一作を一生懸命作って1年が終わっている気がして。長く開発を続けていくにつれて、効率的になったり、慣れてきたりすると思うじゃないですか？ もちろんそういう点はあるんですが、結局毎年のたうち回っています（笑）。多分この先もずっとこうなんだろうと思います。

――『軌跡』シリーズのこの10年は、『零』から始まり超大作となった『閃』が完結。様々な主人公が活躍する『創』へと続き、そして今年は『黎』が発表されています。

PCを中心にやっていた頃は僕たちが好きだったファルコムをいかに再現するか、ということを意識して製作していたのですが、コンシューマーになってからはいかに毎回新しいものに挑戦していくか、変えていくかを意識するようになりました。『イース セルセタの樹海』や『零の軌跡』はその象徴的な作品なんじゃないでしょうか。『セルセタ』はアクションはもちろんですが、それ以外の要素も織り交ぜつつ、なおかつ『イース』らしい作品にしようと心がけました。『零』はもう一番わかりやすいですよね。社内からも反対の声が挙がったぐらいでしたから。今見ればなんてことはないんですけど、当時は作品の世界観があまりにも『空』から変わりましたから。10年経っていまだに新旧のユーザーにご支持いただいてますので、やってよかったなと思います。

『閃』は最初2作の予定だったのですが4作になってしまって……ですがその結果、密度の高い作品になったのかなと思います。帝国編は壮大なスケールでやりたいと『空』の頃から思っていて、それをやりきれたというところは自分たちとしても大きな区切りとなりました。シリーズの物語も半分以上進み、『創』がひとつの総括になったんですね。そういう意味では16年前に考えていたことがひと通り終わったんですよ。共和国編は『空』を開発していた頃は帝国編ほど明確なものがなかったので、わりと（舞台となる）『黎』は仕切り直しのような感じになっています。共和国の具体的な世界観はそれこそ『閃』が終わった頃に改めて構築し直していますし、ゲームエンジンも『黎』から一新するので、世界観やシステムも一歩進んだものとなりますので、物語の後半に向けて着々と準備は進んでいるということは胸を張って言うことができます。

共和国はジンやキリカのように東方風の人たちのイメージが強いですが、複合民族国家で帝国以上に複雑なんですよね。国土が広大なので、それ故の問題を抱えていて、リベールやクロスベル、帝国とは全然違った物語になっていくのかなと思います。また今作では、共和国以外の国々も、共和国を通して明かされていくことになるかと思います。

――『黎』についてもう少し詳しくお話をお聞かせいただけますでしょうか。先日公式サイトもオープンし、キャラクターも発表されました。

ヴァンはもちろん今回の物語の中心となりますが、彼のその立ち位置というかプロフィールそのものがお話の軸になります。共和国は先にお話した通り複雑な問題を抱えている国なので、国を束ねるのは一筋縄じゃいかないはずなんです。綺麗なことばかりやっていたらまとめられないし、かといってダークなことでも駄目だし。なので主人公の立ち位置も、今までのいかにも正義の味方ですよというものとは一線を画した裏稼業となっています。そういった稼業をするにはある程度の人生経験を積んでいないといけないということで、年齢も（ルーファスを除けば）今までの主人公の中で最高齢になっています。これまでのシリーズでは、パーティーに大人や兄貴的存在がいて、主人公が成長していく姿が描かれてきましたが、今回は主人公が年上のポジションになるので、これまでとはまた違った見せ方ができるんじゃないかと思います。



アニエスは名門校の女学生と、ヴァンとは対極にいるような存在ですよね。彼女がどうしてここに来たのか？ というところが焦点になると思います。彼女も重大なものを抱えていて、そういった相手でないと相談できないというところを汲んでいただければ（笑）。



フェリはまず容姿に注目してほしいです。東方系でもなくどちらかというと中東系ですよね。どうしても東方のイメージが強い共和国ですが、中央アジアからペルシャをモチーフとしたような地域には砂漠が広がっています。彼女は猟兵なので、これまで登場してきた猟兵団とも仕事上でお付き合いしたこともあるかと思うので、その辺りも期待してもらえればと思います。



アーロンはたぶん今回が共和国編と聞いて、一番ストレートにイメージできるキャラクターではないでしょうか。ただやはり曲者の主人公と行動を共にするわけですから、まっとうな人間じゃないというのはおわかりになるかと思います（笑）。共和国ではもちろん東方系の問題も描かれますので、その中で彼が大きな役割を果たしていくかと思います。



――これまでの作品にも共和国出身のキャラクターは多数登場していますよね。この辺りはいかがでしょうか？

それはもう『軌跡』シリーズですので。描かないなんてありえないです（笑）。おそらくみなさんが期待されていることはほとんど網羅されているかと思います。10数年ぶりに再登場するキャラクターも出てくるのではないでしょうか。

――ありがとうございます。『軌跡』シリーズの最新作にはもちろん胸が膨らむところですが、一方で、『イース』シリーズの新作にも期待がかかります。

『イース』の方も実は『軌跡』同様、もう一度見直してみたいと思っているところでして。というのも、『イース』も先にお話した新しいゲームエンジンで製作を進めているところなんです。『黎』でこれまでの『軌跡』の印象とは違ったものを抱いていただいた方がいらっしゃるかと思いますが、『イース』の新作も同様に、印象が変わったなと思われるものにしたいと考えているところです。リメイクのお声もいただくのですが、せっかくの10作目、そしてエンジンの一新ということで、新作でお届けしたいと思っています。

直近のシリーズ作品で言えば、『Ⅷ』は特に、これが初めてのファルコム作品でしたというお声を多くいただいた作品でした。W主人公や漂流村、そしてシナリオと、あのゲームのシステムはかなり自分でアイデアを出したので、個人的にはすごく印象深い作品です。クリエイターとしては現時点では一番思い入れのある作品となったかもしれません。

――最後に今後のファルコムの展望も交え、読者にメッセージをお願いします。

冒頭にも言いましたけど、40年続けてきたということは、それだけでも多くの蓄積の結晶なので、自分で絶やしたくはないとこの機に改めて思いました。新しい風を取り入れつつも、ファルコムがやってきたことも残していきたいと思っています。『イース』なんかは僕の代で完結させるつもりは一切ないですからね（笑）。今後もどんどん変わっていきつつも、根底にあるものを意識して、受け継いでいきたいと思っています。今後とも応援していただけるよう頑張っていきたいと思います。よろしくお願いします。

ファルマガ作家陣から お祝いコメントも到着！

10th Anniversary comment



新久保だいすけ　ARAKUBO DAISUKE
漫画家。ファルコムマガジンVol.1 から『みんな集まれ！ファルコム学園』を連載開始。まさかのアニメ化を成し遂げ、現在『も～っと集まれ！ファルコム学園』でも衰えぬギャグセンスを発揮している。



10 周年おめでとうございます！
ファルコムマガジンさんは本格的な小説を書かせていただいたり、脚本を掲載してもらったりと、いろいろなことをやらせてもらえた場でした。
ますますのご発展をお祈り申し上げます！

田沢大典　TAZAWA DAISUKE
シナリオライター。ファルコムマガジン Vol.1 から本誌に参加。本誌創刊以前からファルコム作品のドラマ CD 脚本を多数手がける。その経験を活かし、ノベライズ第一弾となる『零の軌跡』、『碧の軌跡』のノベライズを担当した。



ファルコム 40 周年、ファルコムマガジン 10 周年、おめでとうございます！　やったね！
学生の時から楽しく遊んでいるファルコムのゲームに、小説という形で関わらせて頂いたファルコムマガジン！　これからも楽しい雑誌でいてくださいね！



はせがわみやび　HASEGAWA MIYABI
小説家。ファルコムマガジン Vol.15 から本誌に参加。『空の軌跡』シリーズのノベライズを担当した。ファンタジーのジャンルを中心に長年活躍し続けている。

ファルコムマガジン 10 周年並びにファルコム 40 周年、誠におめでとうございます！
今後も素敵なコンテンツが発表され続けることを切に願っております。

窪茶　KUBOCHA
イラストレーター、漫画家。デフォルメイラストからホラーまで幅広い作風を得意としている。



むらさきゆきや　MURASAKI YUKIYA
ライトノベル作家。ファルコムマガジン Vol.13 から本誌に参加。『零の軌跡』、『碧の軌跡』のノベライズではその意外な企画案で近藤社長を唸らせた。また、ファルコム作品のドラマ CD の脚本も多数担当。著書『異世界魔王と召喚少女の奴隷魔術Ω』（講談社）の TV アニメ第 2 期が 4 月より放送予定。

創刊 10 周年、そしてファルコムさん 40 周年、おめでとうございます。
この移り変わりの激しい業界で、本当に素晴らしいことです。
新刊、新作も楽しみにしております！



さがら梨々　SAGARA RIRI
漫画家、イラストレーター。ファルコムマガジン Vol.44 から本誌に参加。『閃の軌跡』、『魔法少女まじかる☆アリサ』を手掛けたほか、連載終了後もファルコム作品の特典イラストを多数手がけている。





山下憲一　YAMASHITA KENICHI
アニメ脚本家。『みんな集まれ！ファルコム学園』2 シーズンのシリーズ構成と脚本を担当。ファルコムマガジン誌上でシナリオストーリー『魔法少女まじかる☆アリサ』の執筆も務めた。

ファルコムマガジン創刊 10 周年、おめでとうゴーファイます！
『ファルコム学園』のアニメに携わった頃から足かけ 8 年ほど、今でも毎月拝読しています。
『閃の軌跡』アニメ化とのことで、『魔法少女まじかる☆アリサ』もアニメ化しませんか？　脚本なら既に完成しています。もちろん、『ファルコム学園』三期もいつでもお待ちしています。
新久保先生をはじめ、連載作家の皆様、いつも楽しい作品をありがとうございます。
どうかお体にお気を付けて、次の 10 年に向けて益々のご発展をお祈りしています。



啄木鳥しんき　KITSUTSUKI SHINKI
漫画家。YOMBAN（バンダイビジュアル）、ファミ通コミッククリア（KADOKAWA）を経て、現在『英雄伝説 空の軌跡 SC』をファルコムマガジンで連載中。今年で連載開始から 11 年を数える。





この度はファルコムマガジン創刊 10 周年並びに日本ファルコム創立 40 周年本当におめでとうございます！　当時はまだまだ若輩者だった私が軌跡シリーズに関わらせていただけたことは今でもとても光栄に思っております！

草薙アキ　KUSANAGI AKI
小説家。ファルコムマガジン Vol.49 から本誌に参加。『閃の軌跡』でまさかの男女入れ替わり作品を企画、ファンを驚かせた。

YahaKo
イラストレーター。本書で小説挿絵デビューし、以後数多くの人気作品に参加している。

ファルコムマガジン 10 周年、そしてファルコム 40 周年、心よりお祝い申し上げます！
次の 20 周年 /50 周年に向けて新たなファルコム伝説を築いていってください。
今後ますますのご活躍を期待しています。

このタイミングで『創の軌跡』コミカライズのお手伝いをさせていただけて、とてもうれしく思います。
私は『東京ザナドゥ』コミカライズで初めて関わらせていただいたのですが、発売時はまだ描くことが決まっていませんでした。
CM を見て大ファンになり、ゲームを予約した普通の 1 ユーザーだったのですが、その後コミカライズが決まり、本社様にも寄らせていただき感動しかありませんでした。
今もこうして関われていてとても幸せです。
これからも楽しいゲームを、素晴らしい音楽を楽しませていただきたいと思います！
日本ファルコム創立 40 周年、そしてファルコムマガジン創刊 10 周年。
おめでとうございます！

墨天業　BOKUTENGO
漫画家。『東京ザナドゥ』のコミカライズをファミ通コミッククリア（KADOKAWA）にて連載、単行本全 2 巻発売中。現在、ファルコムマガジンにて『英雄伝説 創の軌跡』コミカライズを連載中。



新戦闘システムをチェック！

カルバード共和国を舞台とした新たな『軌跡』シリーズのスタートにあわせ、戦闘システムが一新！
フィールド上のアクションバトルからコマンド型バトルへとシームレスに移行する独自の新システムが採用され、
よりスピーディかつ戦略的なバトルが楽しむことができるようになっているとのこと。
今回はその新たなシステムに迫っていく！

基本的なバトルの流れ

❶フィールド上で敵を発見した場合、
任意でアクションバトルをスタート

※回避して進むことも可能





❷アクションバトル中、戦術オーブメント《Xipha（ザイファ）》を展開することで
そのままコマンドバトルにシフト

※退却することで❶に戻るため、
再度アクションバトルを行うことも可能





■アクションバトルからコマンドバトルへの移行はプレイヤー次第！

アクションバトルからコマンドバトルへの移行は１ボタンで自由に移行可能に！　雑魚敵にはアクションバトル主体、強敵にはコマンドバトル主体で戦略的にと、自由に組み合わせて戦っていこう。



■フィールド上では連続攻撃・回避など多彩なアクションが可能に！

フィールド上ではターゲッティングした敵に対して連続攻撃、強攻撃といったアクションが可能でパーティを組んでいる状態であれば、バトル中に操作キャラを変更することも可能に！　また、敵側も様々な攻撃をしてくるため、ポジショニングや回避といったアクションもポイントになってきそうだ。



■コマンドバトルではクラフト、アーツなど行動順を意識した戦略的なバトルが展開！



コマンドバトルは従来のシリーズ同様、通常攻撃、クラフト（戦技）、アーツ（導力魔法）、アイテムといったコマンドを選択して敵とのバトルを進めていくおなじみのものとなっている。。ただし、従来のＡＴバトルと違い、順番が回ってきたキャラクターは戦闘エリア内を自由に移動することができるため、どの位置で攻撃、回復を行うのか、どのメンバーと追加効果を発生させるのかなど、ポジショニングを意識することでより戦略的なバトルをすることが可能となっているのだ。









タイトル：英雄伝説 黎の軌跡　**発売日**：2021年予定
ジャンル：ストーリー RPG
対応機種：未定　**プレイ人数**：1人
小売価格：未定　**CERO レーティング**：審査予定



「これが仕事ってもんだ――《裏解決屋（スプリガン）》を舐めてんじゃねぇぞ。」

ヴァン・アークライド

Van Arkride

年齢：24 歳　武器：撃剣（スタンキャリバー）

黒髪に蒼のメッシュ、深い蒼色の瞳が印象的な首都イーディスの旧市街を拠点に活動する若き《裏解決屋（スプリガン）》。ドライで現実的な性格に思われることもあるが自分なりの筋を通すタイプで面倒見も悪くない。
仕事柄、様々な業界の人間とも繋がりを持っており、それなりに幅広い人脈があるようだが、それでもどこか心の奥底には触れさせまいとする一面を見せることも。
偶然に近い形で裏解決屋となったものの、その生き方には納得しているらしく“ハズレ仕事”でもボヤきながら確実にこなしている。







「ヴァンさんの流儀は分かります――けど学生にだって譲れないものはあるんです！」

アニエス・クローデル

Agnès Claudel

年齢：16 歳　武器：導力杖（オーバルスタッフ）

首都の名門校《アラミス高等学校》に在籍している 1 年生の女生徒。
艶やかな長い金髪をなびかせる、清楚で柔和な雰囲気の少女だがその涼しげな瞳の奥には強い意志を宿す。
学校では選択科目として導力杖による護身術を履修しているほか生徒会にも所属。気の置けない友人たちと協力しながら庶務としての活動に励む毎日を送っている。
とある事情で亡き「曾祖父」の遺品である“導力器（オーブメント）”が何者かに盗まれたことを知ったアニエスは何故か警察や遊撃士協会への相談を避け、どんな仕事でも受けるという旧市街の《アークライド解決事務所》に依頼を持ち掛けるのだが……。







「わたしが守ります――焔と女神（アルーシャ）の加護を！」

フェリ・アルファイド

Feri Al-Fayed

年齢：13 歳　武器：突撃銃剣（アサルトソード）

褐色の肌とやや短めの髪、小柄な体格が特徴的な高位猟兵団「クルガ戦士団」に所属する年若き猟兵。
幼い頃から本格的な戦闘訓練を受けており、戦いでは一猟兵としてのハードな一面を垣間見せる一方、都会に関する知識には疎いらしく、日常生活では年相応の少女らしい素直な反応を示す。
予ねてより交流のあった他の猟兵部隊が突如消息不明となった報せを受けたフェリは、独自に捜索を開始。
そんな中、噂話に聞いていた共和国の「裏解決屋」との接触を図ろうとする。







「すっ込んでろよオッサン――東方人街（オレら）の流儀が理解できねーならな」

アーロン・ウェイ

Aaron Wei

年齢：19 歳　武器：双星剣（ツインフェンサー）

共和国の巨大東方人街で浮名を流す遊び人であり、血気盛んな青年たちを統率しているリーダー的存在。
三大拳法の一つ《月華流》の剣術と拳法を修める一方、気まぐれに東方華劇で“女形”の剣舞を演じたり、カジノで荒稼ぎするなど破天荒ながらも周りを惹きつけてやまない存在感から《麒麟児》《羅州の小覇王》と呼ばれることも。
東方人街を支配するシンジケート《黒月（ヘイユエ）》では彼を幹部に取り立てようとする動きもあるが、当の本人は組織そのものにさほど魅力を感じていないらしい。





★『創の軌跡』キャラがいよいよ登場だッ!★







3と9



募集中



目つき悪い人



SとM



壮大なるドS計画



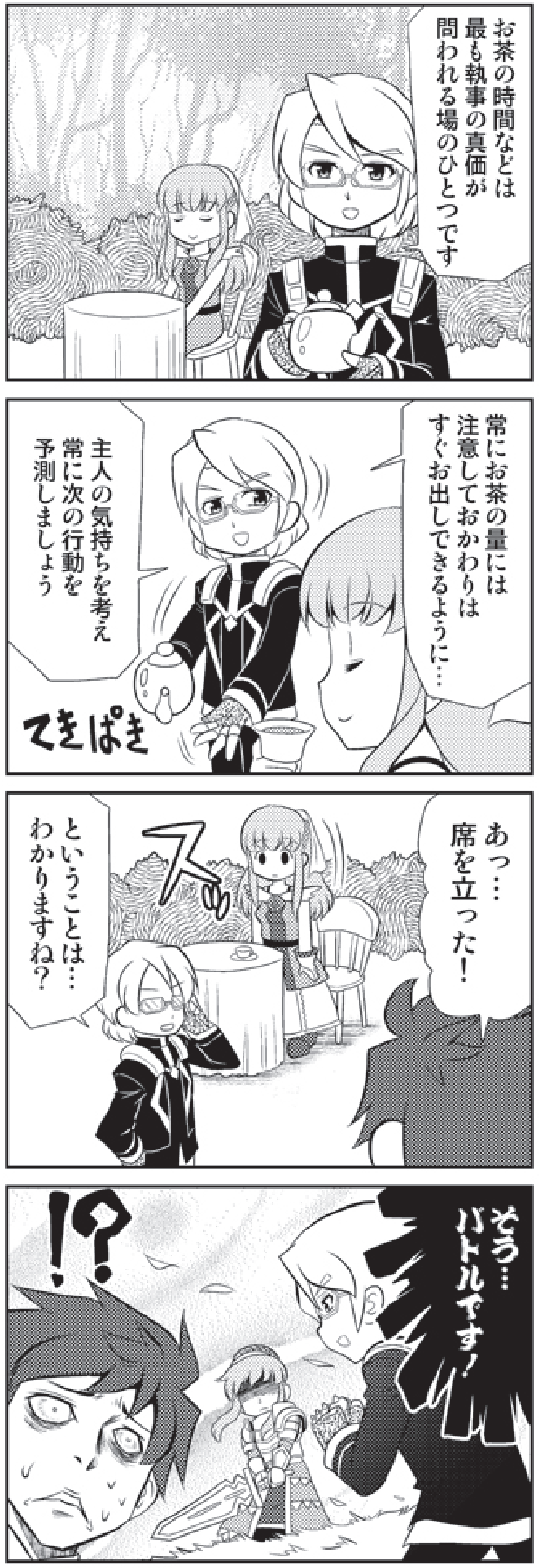
バトラーちがい



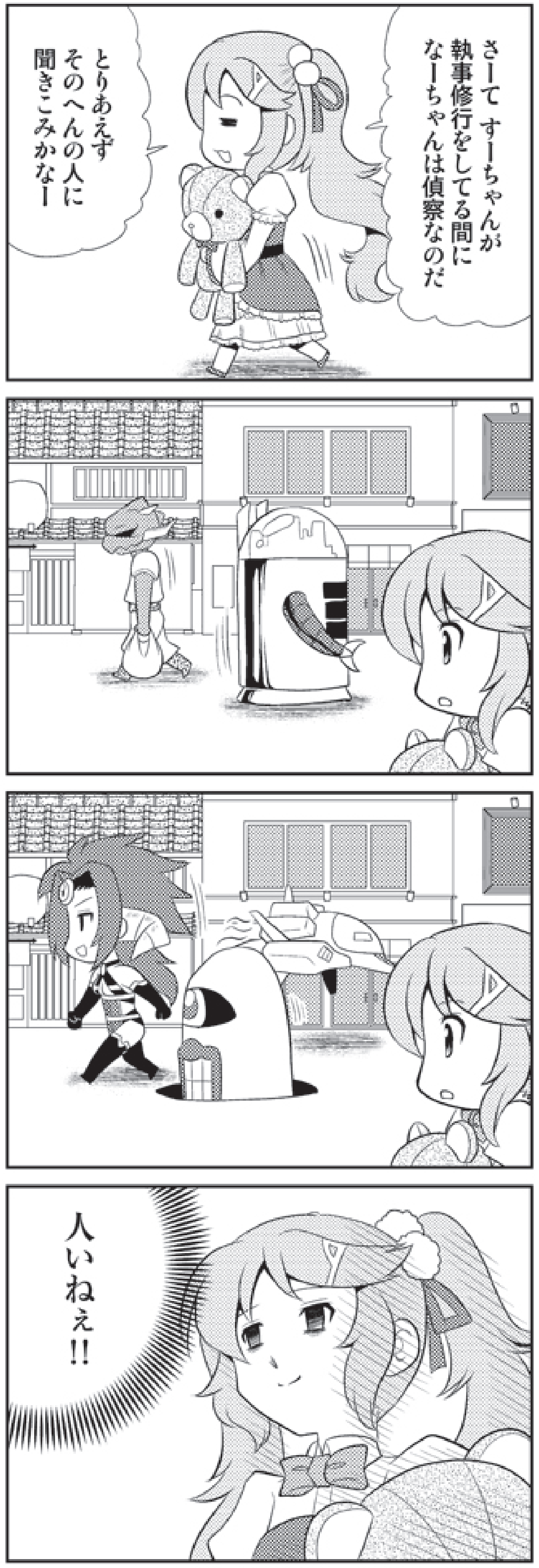
サクラと執事



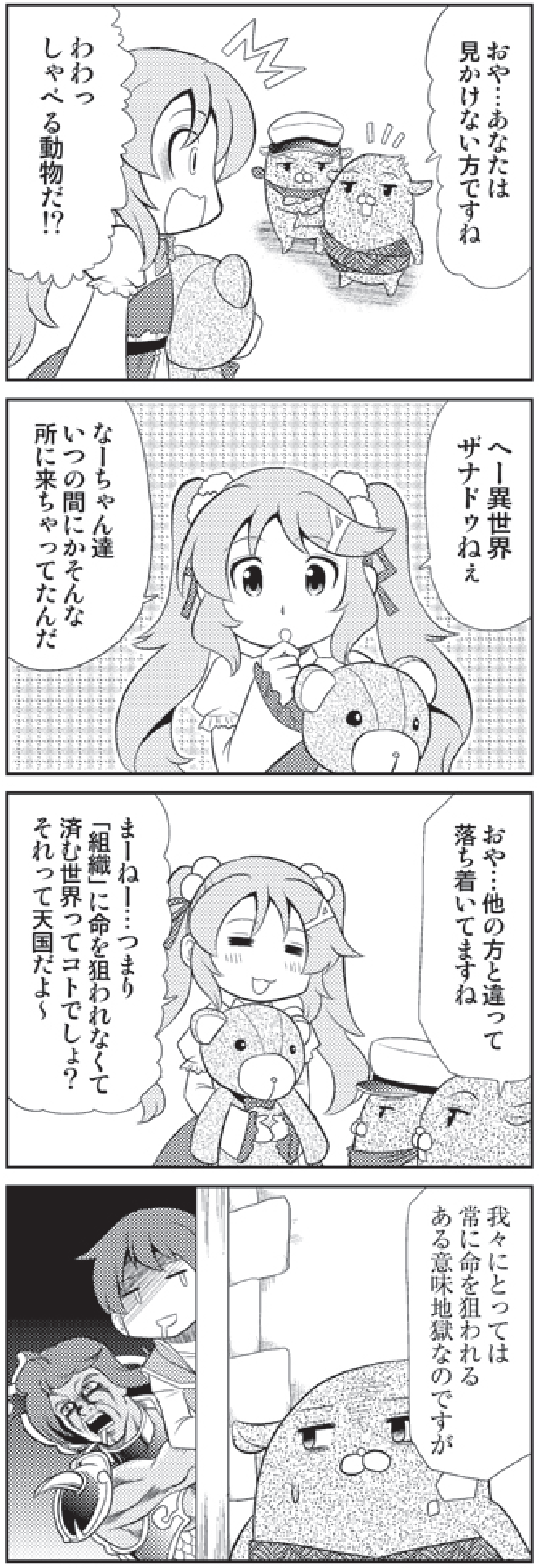
お茶の時間



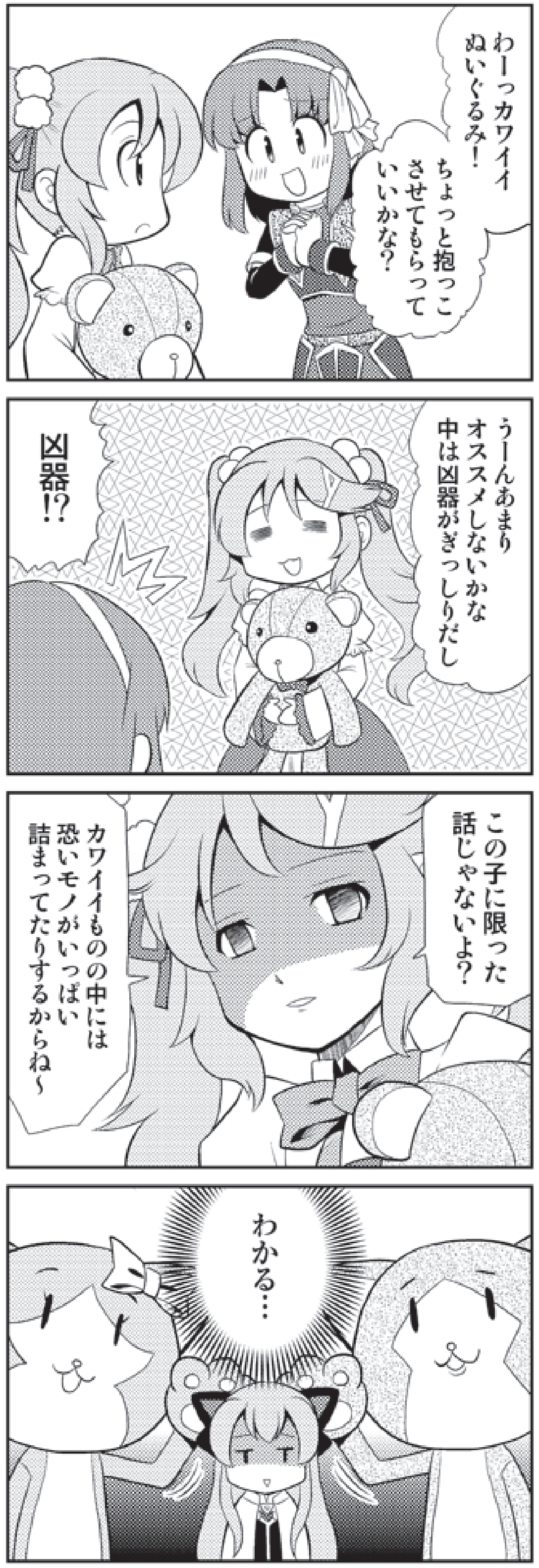
聞きこみ調査



天国と地獄



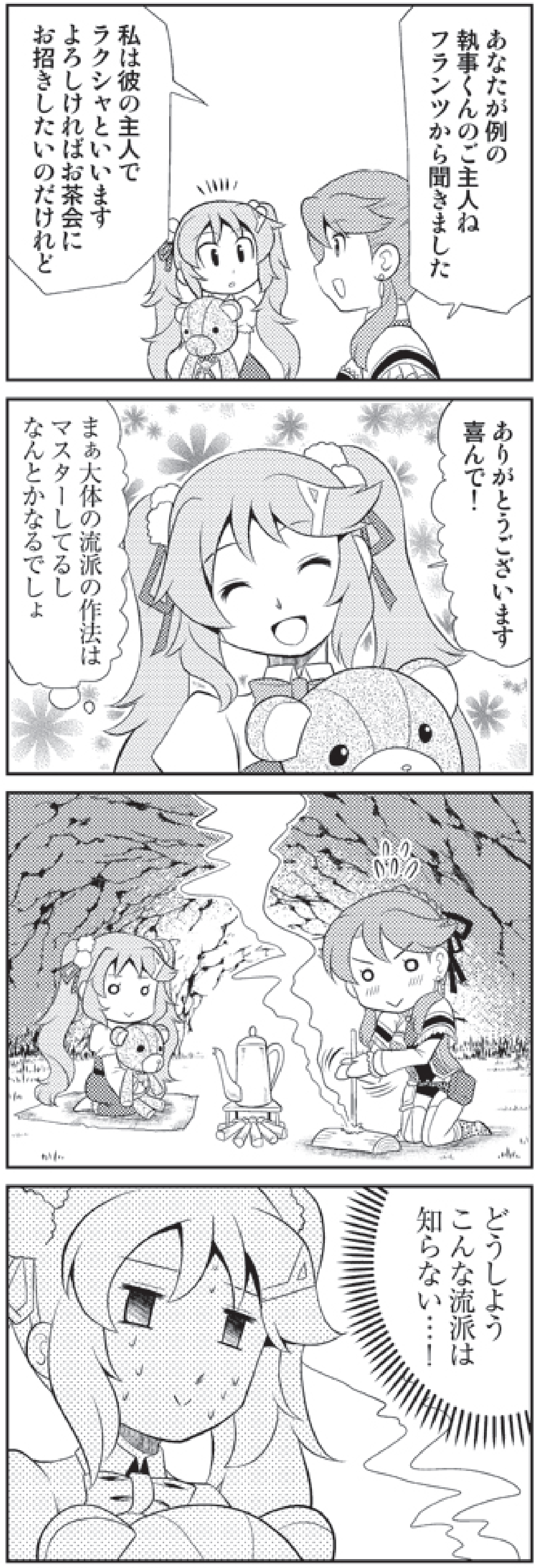
中身



糸切○○

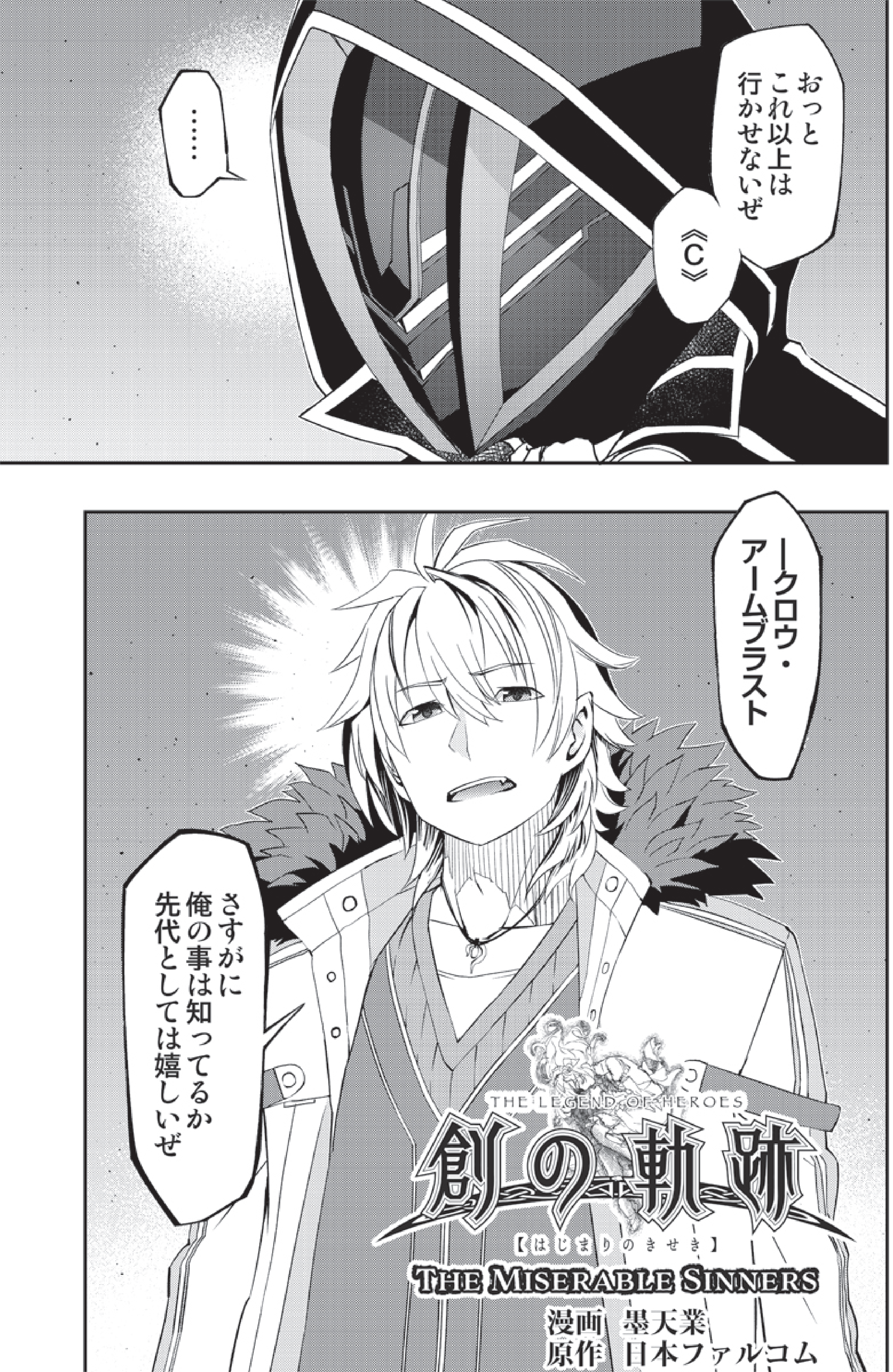


裏ロズウェル家流



授業の成果




おっと これ以上は 行かせないぜ
《C》
……
—クロウ・アームブラスト
さすがに 俺の事は知ってるか 先代としては嬉しいぜ
THE LEGEND OF HEROES
創の軌跡
【はじまりのきせき】
THE MISERABLE SINNERS
漫画 墨天業
原作 日本ファルコム


英雄伝説
閃の軌跡06
原作／日本ファルコム
脚本／恵村まお　漫画／さがら梨々
A5判　160P　定価:本体991円+税
ISBN 978-4-8021-3123-0
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©SAGARA RIRI 2018
好評発売中!!
エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐!
時代が選ぶのは果たして誰か!?
そして友という絆に背を向け、
両雄相まみえる!
激動のクライマックス!
発行:フィールドワイ
発売:メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら➔www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら➔www.field-y.co.jp/falcombooks

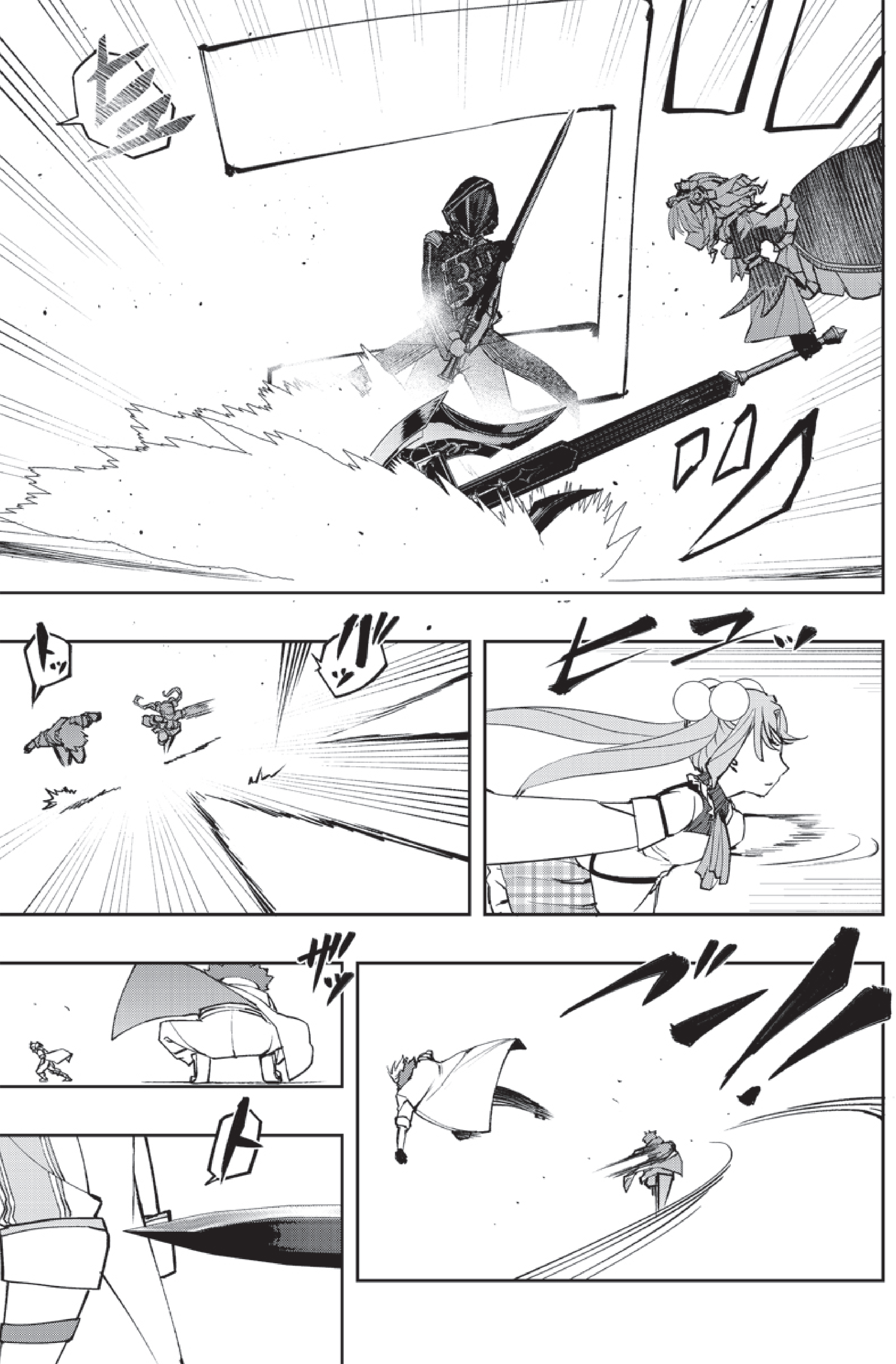


ジュライでのいざこざで もうしばらくこっちには 戻れないと踏んでいたが
あっちも確かに まずい状況だが ひとまず弟分に 任せておいた
頼りになる 後輩がいるってのは ありがたいことだぜ
それで肖像権でも 主張するつもりかね？ もしくは 名誉毀損とでも？
そうしたいところだが こっちとしても ちょっとした 黒歴史でね…
ス…
その仮面を見たら 思わず
ぶち壊したく なるんだよ！
ジャキッ



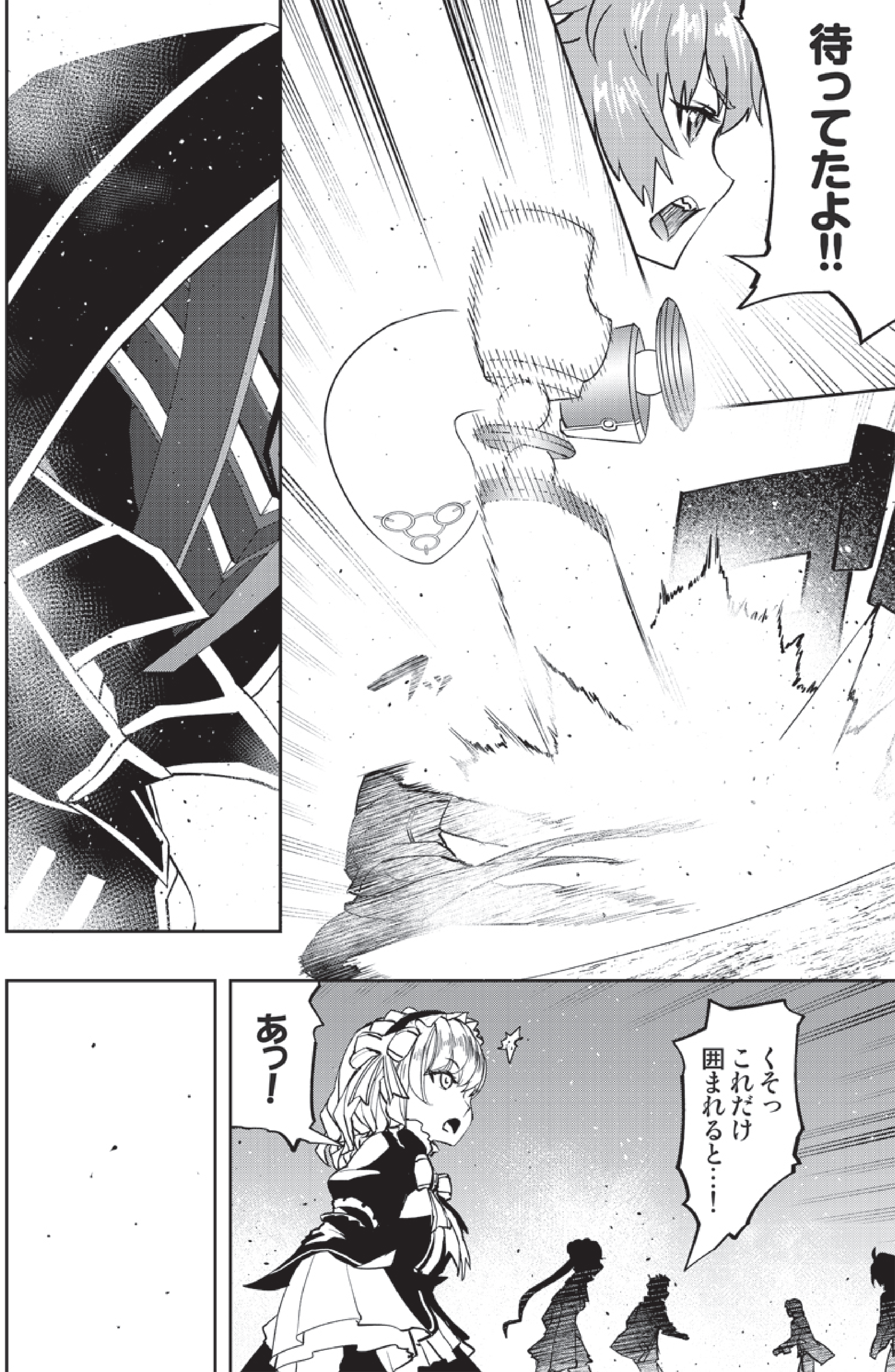
ググ…
ザッ


君のアレよりはセンスのいいデザインだと思うのだが？




君の負けだ
……
ザッ
いや時間は十分に稼いだ
俺の勝ちだぜ

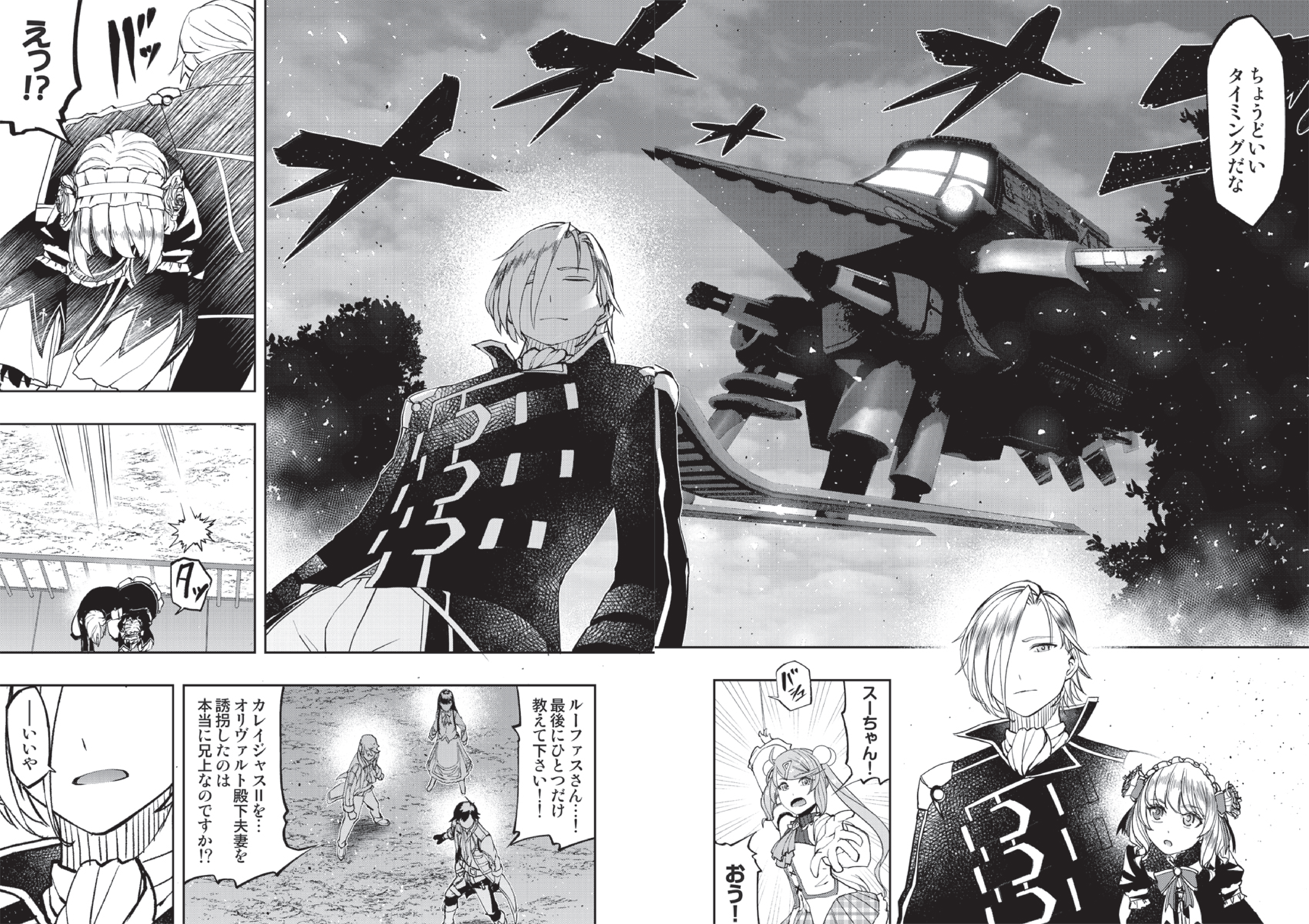

クロウ!? どうしてここに?
やっぱりあの《C》はクロウじゃないんだね!
ドッ
時間をかけすぎたか
そこだ!
ヒュッ


待ってたよ!!
あっ!
くそっ
これだけ
囲まれると…!


もらった!
ガッ
カラ
カラ…

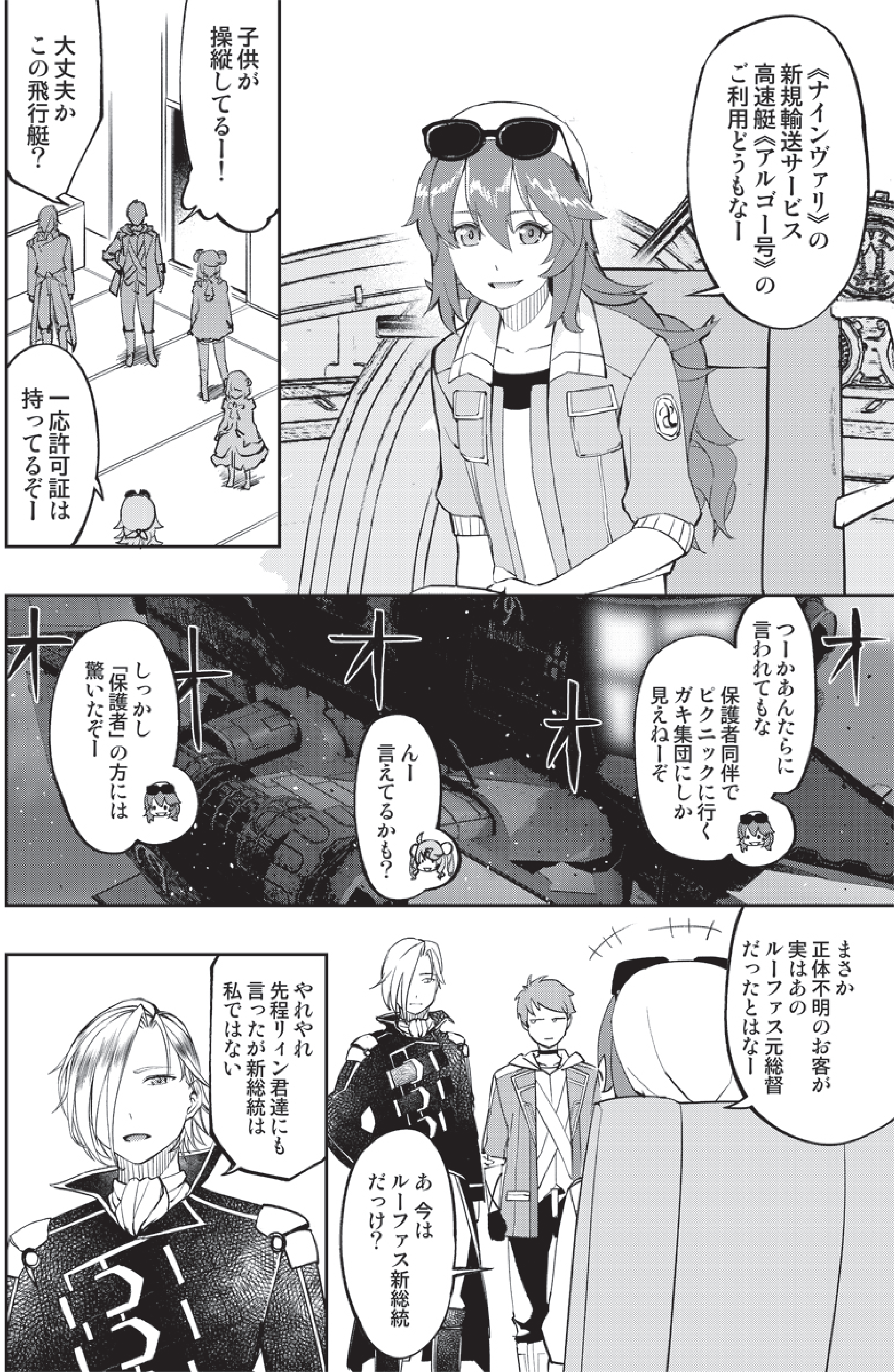

——やれやれ
こうも早くバレてしまうとはね
また成長したなユーシス
リィン君たちも
ルーファス元総督…いいえ
ルーファス新総統！どうして…あなたがここに？

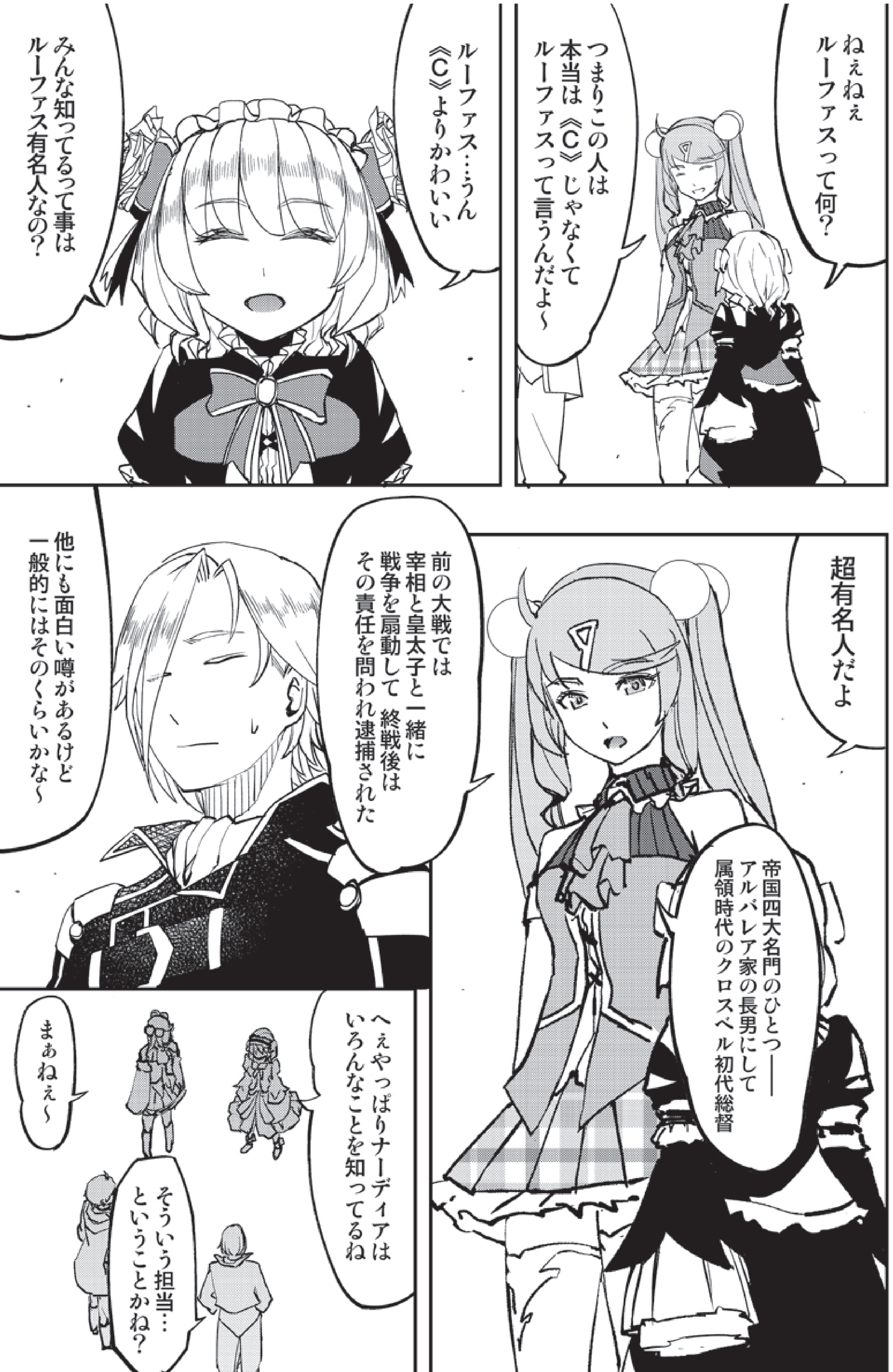
残念ながらその肩書は私のものではない
どういう意味ですか兄上！
あとは自分達で考えたまえ
私にも私の「宿題」があるのでね
…来たか


ちょうどいいタイミングだな
バッ
えっ!?
タッ
バッ
スーちゃん!
おう!
ルーファスさん…!
最後にひとつだけ
教えて下さい…!
カレイジャスIIを…
オリヴァルト殿下夫妻を
誘拐したのは
本当に兄上なのですか!?
――いいや

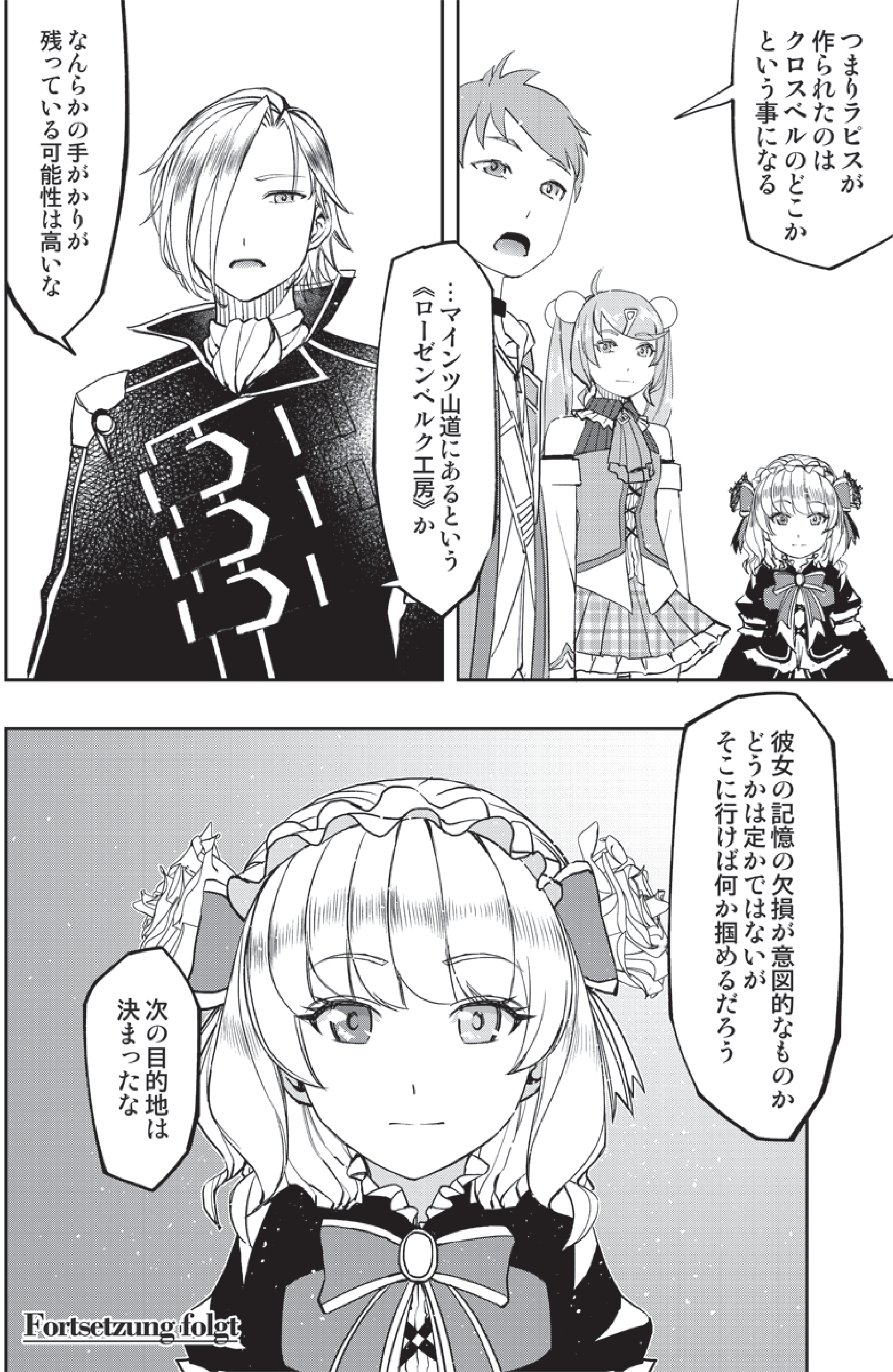

私はあくまで
その事件を
エサにさせて
もらったに過ぎない
エサ…
じゃあ
殿下達は一体…
カレイジャスⅡの
行方を知りたければ
ノルド高原に行くといい
オオオオオオオ
それはどういう――
それでは諸君
次に会うことがあれば
そうだな――
――クロスベルの地で
オオオ


……
時間通り
だったな
おう
お客ら―


《ナインヴァリ》の新規輸送サービス高速艇《アルゴー号》のご利用どうもなー
子供が操縦してるー！
大丈夫かこの飛行艇？
一応許可証は持ってるぞー
オ オ オ オ オ
つーかあんたらに言われてもな
保護者同伴でピクニックに行くガキ集団にしか見えねーぞ
んー言えてるかも？
しっかし「保護者」の方には驚いたぞー
まさか正体不明のお客が実はあのルーファス元総督だったとはなー
あ 今はルーファス新総統だっけ？
やれやれ先程リィン君達にも言ったが新総統は私ではない


ねぇねぇルーファスって何？
つまりこの人は本当は《C》じゃなくてルーファスって言うんだよ～
ルーファス…うん《C》よりかわいい
みんな知ってるって事はルーファス有名人なの？
超有名人だよ
帝国四大名門のひとつ――アルバレア家の長男にして属領時代のクロスベル初代総督
前の大戦では宰相と皇太子と一緒に戦争を扇動して 終戦後はその責任を問われ逮捕された
他にも面白い噂があるけど一般的にはそのくらいかな～
へぇやっぱりナーディアはいろんなことを知ってるね
まぁねぇ～
そういう担当…ということかね？


スウィン君にナーディア君
君たちに聞きたい
彼女を私のところに届けるように依頼したのは製作者であるヨルグ・ローゼンベルク老人で間違いないかね？
まぁ…一応そうなる
優先度で言えば帝都での要件を処理した今このままかのご老人を訪ねるべきところだが…
その言い方だとご老人に何かあったのかね？
ううん
おじいちゃんは元気だよ～
でも訪ねても多分無駄かな
直接オレ達に依頼したのはヨルグ老人だが彼もまた誰かに頼まれたと言っていた覚えがある
おそらくおじいちゃんがラーちゃんを作った事も含めてね
でもあの様子じゃぁ深い事情までは知らないんじゃないかな？
そうか…となると
やはりその失くしたという記憶をなんとかせねば…
ラピス君がどこで作られていたのかそれに関しての記憶はないのかね
それについては心当たりがある
俺たちは別にヨルグ老人からトランクを直接受け取ったわけじゃない
彼の指示でクロスベルにある《月の僧院》からあれを見つけたんだ
おじいちゃんがクロスベルを出る前にあそこに隠したみたいだね～

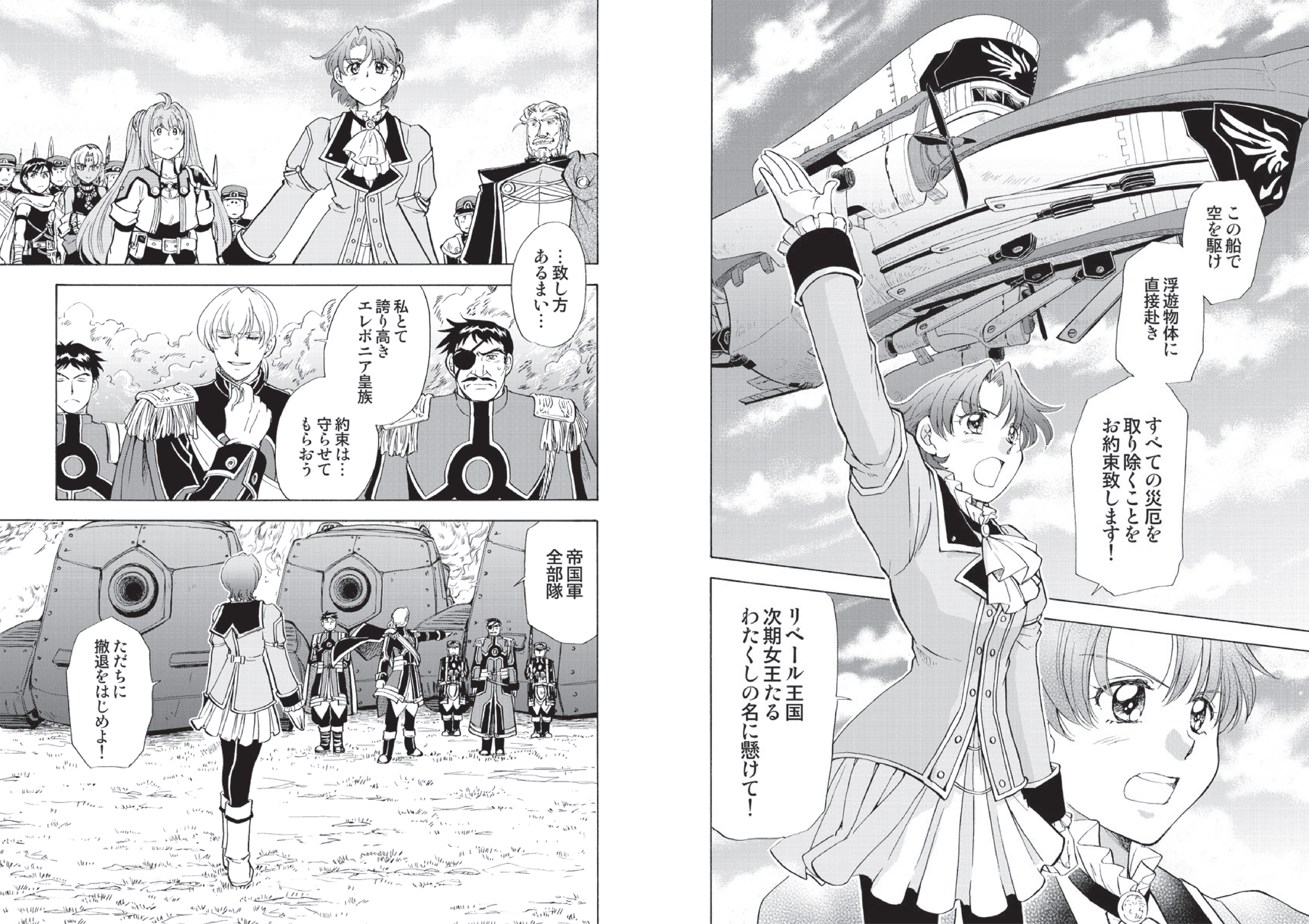


つまりラピスが作られたのはクロスベルのどこかという事になる
…マインツ山道にあるという《ローゼンベルク工房》か
なんらかの手がかりが残っている可能性は高いな
彼女の記憶の欠損が意図的なものかどうかは定かではないがそこに行けば何か掴めるだろう
次の目的地は決まったな
Fortsetzung folgt


FB ファルコムBOOKS
英雄伝説 零の軌跡
午後の紅茶にお砂糖を
著者：むらさきゆきや
イラスト：窪茶
こんな『零の軌跡』もアリ!?
日本ファルコムの大ヒット RPG『英雄伝説 零の軌跡／碧の軌跡』の主人公【特務支援課】は意外とまったり!? 本編とはひと味違った彼らのゆる〜い毎日を描いて『月刊ファルコムマガジン』で大人気を博したノベライズ作品が単行本で登場！
好評発売中!!
定価：1,100円+税
ISBN：978-4-89610-255-0
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp

FB ファルコムBOOKS
英雄伝説 零の軌跡
四つの運命
著者：田沢大典　イラスト：松竜
特務支援課はここから始まった!!
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
日本ファルコムの大ヒットRPG『英雄伝説 零の軌跡』から、ロイドたち特務支援課の過去エピソードを描いたオフィシャルノベライズ。ゲーム本編では語られなかった名シーンの裏側やキャラクターそれぞれの心情が今、明らかになる！
原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）
価格：1,155円(税込)
ISBN:978-489610-215-4
全国書店にて大好評発売中!!
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp


空の軌跡SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム
なぜ ここに 飛行船が…!!
どうして この状況で 空を飛ぶことが できる…!?
これが
我がリベールが誇る 世界最高峰の 高速巡洋艦
アルセイユ!
!!
わたくしたちの 提示できる
可能性です!


この船で
空を駆け
浮遊物体に
直接赴き
すべての災厄を
取り除くことを
お約束致します！
リベール王国
次期女王たる
わたくしの名に懸けて！
…致し方
あるまい…
私とて
誇り高き
エレボニア皇族
約束は…
守らせて
もらおう
帝国軍
全部隊
ただちに
撤退をはじめよ！


帝国軍が…
引き揚げてく…
すごいわ！クローゼ！
あんな大軍隊をひとりで撃退しちゃうなんて！
わあっ！
い…いえ
わあああ♡
これは私の力ではなく…
おそらく……
…ほらっ！
アルセイユが着陸するみたいですよ
行ってみましょう！


皇子！
これはどういうおつもりですか!?
仕方あるまいあれだけ見事に切り返されたのではな
それにあのまま戦争をけしかけたとしても
蒸気戦車隊などリベールの白き翼にけちらされて終わりだろう?
おっしゃる通りぐうの音も出ませんよ
実に見事な猿芝居でしたな！

やっぱりバレちゃった?
あたりまえです！
リベール王国におられるとは聞いていましたが
よもやこんなことを企むためだったとは…！
しかし…これは冗談では済まされない！
帝国政府の意志に背くと思われても仕方のない行為ですぞ！
一体 皇子は何を考えておられるのか!?
ゼクス中将
いや
先生
あなたも本当は気づいているはずだ


唐突すぎる蒸気戦車の導入
不自然極まるタイミングでの出動命令
まるで今のリベールの混乱っぷりを予見していたかのような采配じゃないか
今回の件で確信したよ
彼は間違いなく《身喰らう蛇》と通じている
皇子…
まさか貴方は…
10年前と同じような欺瞞は
二度と繰り返させせない
彼の美しくないやり方を
これ以上見過ごしたりはしない


ボクは
帝国に巣喰う怪物を退治することに決めた！
これは
その宣戦布告というわけさ
……それがどれほど困難を伴うことなのか
理解しておいでなのか？
そりゃぁもちろん


ならば
なぜ…
先生
ボクは
リベールを旅していて
ひとつ思うことがあったんだ
どんなに厳しい場所に身を置くことになろうとも
人は
国は
その気になればいくらでも誇り高くあれるんだ
…と


そして
こうも思った
ボクの祖国とその同胞にも
同じように誇り高くあってほしい
できればその理想に先生にも協力してもらいたいんだけど
ね♡


とりあえず
撤退に関してはひとまず了解しました
先生ー♡
ただし！
我が第3師団はあくまで先駆け
すでに帝都ではリベール侵攻に向けて10個師団が集結しつつあります
今日を入れて3日……
それ以上の猶予はありますまい
その間にリベール王国はすべての決着をつけねばならんということか


これはいかんな！
同盟国としては助太刀をしてさしあげなければ！
じゃあ！そういうことで！
はぁ!?
世界の平和を取り戻してくるからね！
皇子!!
ミュラー！
おまえも皇子について行け！
危なくなったら首根っこ掴んででも連れ帰るのだぞ！
ええ叔父上
元よりそのつもりです！
皇子…
大きくなられましたな
次回に続く

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

「ファルコム40周年イラストコンテスト」開催！受賞者には記念イラストを使用した豪華賞品をプレゼント！



日本ファルコムでは、2021年3月9日（火）に創立40周年を迎え、参加型企画『ファルコム40周年 イラストコンテスト』を開催中。公式ファンアート企画としては『英雄伝説 閃の軌跡Ⅱ イラストコンテスト』以来、実に6年ぶりの開催となります。
今回のコンテストでは「イラスト部門」「4コマ部門」「クリエイティブ部門」の3部門で作品を募集。受賞作品に選ばれた方には40周年記念イラストを使用した豪華賞品をプレゼント。この機会にぜひご応募ください！

■募集期間
2021年3月9日（火）～2021年6月6日（日）

■各部門紹介

イラスト部門

ファルコム歴代タイトルすべてが対象!
あなたの好きなキャラクターや想い出の作品を思い思いに描いてください!



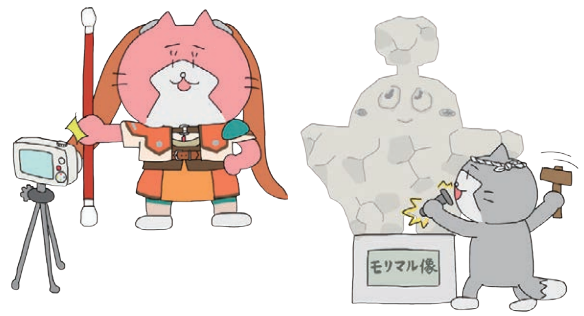
クリエイティブ部門

「コスプレ」や「痛車」、「ゆるみっしぃ仮装」から「みかんアート」まで… あなたの創造力次第で可能性は無限大! ファルコムに関するあなたのクリエイティブ魂を披露してください!

4コマ部門

ファルコムの歴代タイトルやキャラクターを題材に4コマのストーリーを作り上げてください!
くすっと笑ってしまうもの、ほろっと泣けるもの、オチがついていないもの…なんでもウェルカムです!





■賞品

グランプリ（各部門1名様）
40thオリジナルクッション【非売品】
40thオリジナルマグカップ【非売品】

部門賞（各部門4名様）
40thオリジナルマグカップ【非売品】

■「イラストコンテスト」特設ページ
https://www.falcom.co.jp/40th/contest



※賞品の内容およびデザインは予告なく変更になる場合がございます。予めご了承ください。
※応募ルール、応募方法等の詳細につきましては「イラストコンテスト」特設ページをご確認ください。

『英雄伝説 閃の軌跡シリーズ』初のTVアニメ化プロジェクト始動！

巨大軍事国家エレボニア帝国を舞台に描かれる『英雄伝説 閃の軌跡』シリーズのアニメ化プロジェクトが決定！
原作『英雄伝説 閃の軌跡』では巨大軍事国家エレボニア帝国を舞台に、シリーズ4作を通して主人公リィン・シュバルツァーとその仲間たちの物語が描かれましたが、今回のアニメシリーズでは、原作をベースにゼムリア大陸西部での物語が描かれることになります。
シリーズ初のTVアニメ化プロジェクトは2022年放送予定。今後の続報にご期待ください！

■『軌跡シリーズ』ポータルサイト
https://www.falcom.co.jp/kiseki/



ファルコム創立40周年を記念した限定グッズが登場！

ファルコム40周年記念タンブラー

ファルコム40周年記念ロゴをデーンとプリントしたステンレスタンブラー。飲み物を直接入れて使ってもよし、コンビニで手軽に買える持ち帰りコーヒーをカップごとすっぽり入れて使ってもよし。保温・保冷効果がぐっとUP！ さびにくく匂いも付きにくいのがポイントです。

発売日：2021年5月14日(金)
サイズ：直径85×H105mm
容量：360ml
材質：ステンレス
色：マットホワイト／マットブラック／シルバー／ゴールド
価格：2,600円（税抜）



ゆるみっしぃバンブーマグ

ゆるみっしぃカフェ開店?
自然由来の環境に優しいバンブーファイバーを使用したマグカップ。軽くて割れにくいので、キャンプやピクニックなどのアウトドアシーンで大活躍。ゆるみっしぃ生誕5周年記念にいかがでしょうか。

発売日：2021年5月14日(金)
サイズ：直径77×H77mm
容量：310ml
材質：バンブーファイバー、コーンパウダー、
色：ホワイト／ブラック／レッド
備考：耐熱温度90℃
価格：1,500円（税抜）



ファルコム40周年記念 B2タペストリー

ピンクのラインにはイースシリーズ、グリーンのラインには東京ザナドゥとモナくん、ブルーとイエローのラインには空～黎の軌跡までの軌跡シリーズのキャラクターたちが描かれた40周年スペシャルイラストを、B2サイズのタペストリーにのせてお届け!「国産ダブルスエード」の手触りのよい美麗タペストリーをぜひお部屋に飾ってお楽しみください。



発売日：2021年5月14日(金)
サイズ：B2（W515×H728mm）
価格：3,500円（税抜）

■ファルコムショップURL　https://falcom.shop/contents/falcom40th

3月の
新／衣装替えキャラクターをチェック！



THE LEGEND OF HEROES 暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
３月はついにメインストーリーの終章第１弾が実装！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/

公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

メインストーリー 終章 第１弾 「宣戦布告／後篇」を実装！

公都が混乱に陥る中、事件解決の為、奔走するナハトたちにとある依頼が舞い込む。
一方、アーデント周辺の森では魔獣たちが大量に出現し、事態はさらに深刻化していく。
それぞれのプライドを賭け、物語は終局へと進む。









4月の新規衣装替えキャラクターは？

銀

劇団アルカンシェルのアーティストとして活躍するリーシャ・マオのもうひとつの顔である、東方で伝説の魔人として恐れられる凄腕の凶手（暗殺者）。

※画像は開発中のものです。　※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

『創の軌跡』の発売を記念して
『軌跡』シリーズの原点を振り返る！

英雄伝説 空の軌跡3 ～王都繚乱～

第3回



リベール王国を舞台とした『英雄伝説 空の軌跡』、クロスベル自治州を舞台とした『英雄伝説 零の軌跡』と『英雄伝説 碧の軌跡』。そして、エレボニア帝国を舞台とした『英雄伝説 閃の軌跡』。これまでゼムリア大国西部の各国を舞台として物語が紡がれてきた『軌跡』シリーズだが、最新作『英雄伝説 創の軌跡』は、これまでのシリーズに登場したキャラクターや世界観をより掘り下げていく作品ということで、シリーズの原点ともいえる第１作『英雄伝説 空の軌跡 FC』ノベライズを好評連載中！

製品情報
好評発売中
著　　　:はせがわみやび
イラスト:ワダアルコ
定　　価:1,400円(税別)

昼過ぎに街を出た。門を抜けて街道を南へと下る。

どこまでも続く平原の道は《トラット平原道》と呼ばれている。左右に点在する森を眺めながら歩けば、街道はいつしか東へと向きを変えていた。

夕方遅くには小さな村の小さな門が見えてくる。大きな山と緑の森を背にして、柵の向こうにぽつぽつと家屋が建っているのが見えた。平屋の家が多く、こじんまりとしている。

「へぇ～、ここがエルモ村かぁ。雰囲気のいいとこねぇ。って……なにこの匂い……」

エステルの鼻をついたのはタマゴを燻したような匂いだ。けしてイヤなというわけではないが、独特な匂いだった。

「あ、これ、地下から湧き出してくるお湯に入っている硫黄の匂いなんですよ」

ティータが教えてくれた。

「いおう?」

「はい。温泉水の成分の一つなんです」

「温泉が湧いている所では大抵こういう匂いがするらしいね」

「へぇ……」

「あ、でも、いつもよりちょっと匂いが薄いような気がします……」
「そうなんだ?」
くんくん、と嗅いでみたものの、エステルにはよく判らなかった。ポンプが故障したことと関係あるのだろうか?
ティータによると、ポンプ小屋の鍵は旅館『紅葉亭』の女将さんである『マオおばあちゃん』が持っているとのことだ。
紅葉亭は東方風の造りの木造二階建ての建物だった。
「こんにちは、マオおばあちゃん」
支配人室へ足を踏み入れると、奥の机で書き物をしていた高齢の女性がティータの声に顔をあげる。白くなった髪を頭の後ろでまとめた、ふくよかな女性だ。ティータを見て微笑みを浮かべた。
「おお、ティータ。よく来てくれたね。ついさっき、工房長さんから連絡があったよ。ラッセルのやつ、アンタに修理を押しつけて自分は研究三昧してるんだって?」
「そ、そんなことないよ～。おじいちゃん、ちゃんと来るつもりだったけど、わたしが無理を言っちゃって……」
ティータが庇うと、マオは深々とため息をついた。
「アンタって子は本当に健気でいい子だねぇ。でも、あんまりあのジジイを甘やかしちゃあいけないよ？　昔から研究のことしか頭になくて、放っておいたらどこまでも自堕落に過ごすからねぇ」
「あ、あはは……」

「まあ、元気そうでよかった！」
ティータの背中を小さな手でバシバシと叩いてから、その後ろにいるエステルたちに視線を向けてくる。
「ん、あんたたちは……?」
「あ、おばあちゃん。紹介するね。エステルさんと、ヨシュアさん。遊撃士協会の遊撃士さんで、ここまでわたしを送ってくれたの」
紹介されてエステルとヨシュアは頭を下げた。
「ティータを送ってくれたのかい。わざわざ済まなかったねぇ。アタシゃ、ここで女将をしてるマオってババアさ。ラッセルはアタシの幼なじみで、この子も実の孫みたいなもんさね」
孫、と言われたティータが照れた笑いを浮かべる。
「えへへ……あ、それでおばあちゃん。導力ポンプが壊れちゃったって?」
「そうなんだよ。四十年前の機械だし、そろそろ寿命なのかねぇ……いずれ買い換えるつもりだけど、とりあえず応急手当をしてほしいんだ。ティータ、できるかい?」
「うん、まかせて」
力強く頷いたティータが、マオからポンプ小屋の鍵を受け取る。そのまま小屋まで駆け出していってしまいそうな勢いだ。
「あたしたちも手伝うわよ！」
「えっ、でも……」

「エステル、ひとには向き不向きがあるんだよ?」
ティータとヨシュアの顔に浮かんだ不安げな表情に、エステルは思わず「なによ」と口を尖らせてしまう。
そのときエステルたちの背後で扉が開く音がした。
「おーい、マオ婆さん! ちょっといいかい?」
「エド、戻ったのかい。すっとんきょうな顔して、いったい何があったんだい?」
男がマオおばあさんに向かって言うことには、王都から来たという女性の客が夕方になっても帰ってこないとか。
エステルは窓の外の空を見た。もう東のほうの空は薄墨色に変わってきている。自分たちが辿ってきた街道を思い返してみた。さすがにツァイスの街のように十歩も歩けば次の導力照明があるという道のりではない。
暗くなれば街道を歩いていてさえ危険極まりない。
ヨシュアと目が合う。どうやら同じことを考えていたようだ。
「その人がどっちに行ったか詳しく教えて。あたしたちが見つけてくるわ」
とどのつまり、遊撃士には遊撃士に向いた仕事というものがあるのだ。

† † †

エステルとヨシュアが『見覚えのある泊り客』を見つけて宿屋に帰ってきたときには、ポンプの修理は終わっており、あの独特の硫黄の香りも心なしか強くなっているように感じられた。陽はとっくに落ちていてツァイスへと戻ることは諦める。「お礼といってはなんだけど、今日は泊まって休んでおいき」マオおばあさんに、そう言って勧められた為もあった。
食事の前に、さっそく裏手の離れにあるという温泉に入ることに。
離れの入口にかかっている垂れ幕に男女の別が書いてあって、エステルとティータはもちろん女性用と書かれたほうの扉を開ける。
湯気の立ち込める板張りの間の中央に、なみなみとお湯を湛えた大きなお風呂があった。
丸い管を通ってきたお湯が、風呂桶へと絶えず流れ落ちている。
「ひろーい! へえ、このお湯がぜんぶ地下から湧き出てきたって思うと、ちょっと感動するわね」
「ここではお湯を溜めておかずに、そっちから外へ流し出してるんです」
「捨てちゃってるの?」
「外に露天風呂がありますから、そこを経由させてから川に流しています。だから、外のお風呂のほうが少し温度が低くなるんです。そのぶんずっと入っていられるんですよ」
「なるほど~」
だから汲み上げポンプが故障してしまうと、この宿のお風呂のお湯はすぐに尽きてしまうわけだ。それであんなに修理に熱心だったわけかと納得する。

湯殿が石造りではなく木製だった。
どうやら『紅葉亭』は全体的に東方風の造りになっているらしい。湯気のなかに木の良い香りが混ざっている。
身体をざっと洗い、お湯を全身に掛け流してから湯船に入る。
広い湯船に肩までつかって、エステルは体の力を抜いていった。
隣で、ちゃぽんと小さくお湯が揺れた。ティータが入ってくる。
「ほふ～、旅の疲れが身体から溶け出る気がする～」
「そういえば、エステルさんたちって歩いて旅をしてるんですよね？　なんで飛行船を使わないんですか？」
「うーん、そうねぇ。修行のためかな？　あと……父さんの言葉っていうのが大きかったのかもしんない」
「カシウスおじさんの……？」
「父さんの教え子でシェラ姉ってのがいるんだけど、父さん、やっぱりその人に徒歩での旅を勧めたのよね。自分が守るべき場所を、自分の足で実際に歩いて確かめてみろ、ってね」
「わ、カッコイイ……」
「カッコイイかどうかは判らないけど……。あの言葉に影響されてるのは間違いないわね。はあ、今ごろどこをほっつき歩いてんだか」
白い湯気の立ちのぼる天井を見上げて、考えてしまう。心配していないといえばそれはさすがに

嘘になる。
「エステルさん……」
「あはは、ごめんごめん。しめっぽくなっちゃったかな。ま、遊撃士の仕事も大変だし、心配ばかりもしてられないからね。今できるのは……うん、信じることくらいかな」
「信じること……」
「ん、どうかした？」
「ううん、なんでもないです。あっ……そうだ！　わたし、エステルさんに聞きたいことがあるんですけど」
「聞きたいこと？　なになに？　なんでも聞いていいわよ？」
「えと、あの、その……」
ティータは頬を赤らめながら聞いてきた。
「エステルさんとヨシュアさんってもう結婚しているのかなぁって」
予想外の問いにエステルの声は知らず大きくなってしまう。
「な、な、な……。なんでそうなるワケ⁉」
「え？　あれ？　あれ？　だって名字が同じだし。兄妹にしては似てないから、てっきり……」
「に、似てないのは血が繋がってないからだし、名字が同じなのはヨシュアが父さんの養子だから！」
「あ、そーなんですか……。わたし、てっきり……」
「だ、だいたい、あたしとヨシュアって、そんな雰囲気になったことすら……」

（そんな雰囲気ってなんだ、そんな雰囲気って！　ちがう、そーじゃなくて！）
ざぶんと顔を湯船に沈めてしまう。
ぶくぶくぶく。
もごもごと口を動かすたびに泡が立ち昇る。
「エステルさん？　お顔、まっかですけど……」
「あわわ……。なんでもない、なんでもないから！」
勢いよくエステルは湯船から立ち上がった。
「そ、そういえばあっちに露天風呂があったんだっけ？　のぼせてきちゃったし、あたし、ちょっと行ってくるね！」
湯船に突っ込んで熱くなった顔を冷やしたいと思ったのだ。
タオルを身体に巻き付け奥にある扉に向かう。
後ろでティータが何か言っている気がしたけれど、慌てていて、よく聞こえなかった。
扉を開けて、エステルは露天風呂のあるという外へ出る。
さあっと涼しい風が流れてきて、ぶるっと身体を震わせた。
そこは周りを柵で囲まれたちょっとした庭になっていた。ちゃんと、外からは覗けない造りになっている。土ではなくて石を敷き詰めてあって、湯船まで足を汚さずに歩けるようになっていた。
湯船の周りと、庭のあちこちに大きめの岩をごろりと転がしてあるのが目につく。オブジェみたいなものだろうか。

もやと岩のおかげで視界が通らなくなっている。
湯船の縁に置いてあった桶を見つけた。湯をすくって身体に掛けてからお湯に爪先を浸す。身体を湯に沈めようとしたところで声が聞こえた。
「やあ、エステル。お先に入らせてもらってるよ」
声に顔をあげる。風にもやが流れて湯に腰まで浸けていた人物の顔が見えた。ハダカだった。痩せているように見えるけれど、肩から胸のあたりにかけて意外としっかりと筋肉がついている――。
ヨシュアだった。
一瞬、頭の中が真っ白になる。
「はは……この格好だと、さすがにちょっと照れるね」
状況を理解するまでの時間をたっぷりかけてから――。
「きゃあああああああっ！」
エステルは悲鳴を上げた。

†　†　†

「はぁ～。あのでっかい悲鳴って、エステルちゃんのだったんだぁ」
「うっ……まぁ、その」
エステルはテーブルに突っ伏した。

「その服でそんな格好してると見えちゃうよ、エステルちゃん」
「うぇ？」
慌てて身体を起こして、服の前を合わせる。
風呂上がりに着るようにと用意されていた東方風の服をエステルは羽織っていた。この服は一枚の布を身体の前で合わせて帯で締めているだけなので、気をつけてないとすぐに着崩れてしまう。
「でもどーせ、見えるほどのもんないし」
などと開き直りつつ帯を締め直してから、軽く目の前の相手を睨みつけた。
旅館の二階にある休憩室。ティータとともに涼んでいたエステルをからかってきたのは、エステルとヨシュアが連れ戻してきた『見覚えのある泊り客』だった。
ドロシー・ハイアット。リベール通信社のカメラマン。道に迷って宿に帰れなくなっていたのはエステルたちに馴染みの、王都の新聞社の記者だったのだ。
丸い眼鏡の奥で目が笑っている。
「どうせなら、そーいう面白いことは、わたしがカメラを持っているときにしてくれると嬉しいですよぉ。あーでも、湯気でレンズが曇っちゃうか」
「やりません！」
オーバルカメラの代わりにフルーツ牛乳を片手にしたドロシーがころころと笑った。
釣られるようにエステルの隣に座っている少女も笑いだした。
「ほ、ほら！ ティータちゃんにも笑われちゃったじゃない！」

「それって、わたしのせいじゃないよねぇ」
「ドロシーさんのせい！」
「おやおや？」
「あ、ううん。笑ったりしてごめんなさい。ただ……さっきのふたりのやりとりを思い出してしまって……うらやましいなって思って……」
「ふたりのやりとりって、あたしとヨシュアの？」
こくんとティータが頷く。
あのとき、裸を見られて――いや、見てしまって、ヨシュアとはちょっとした言い合いになった。
（あたしはタオルを巻きつけていたから見られてはいないはずだけど――だよね）
悪いのは注意書きを読んでいなかった自分なのだが、あのときは頭がパニックになっていた。ヨシュアに突っかかり、彼は肩をすくめて湯船から出て行ったっけ。ちょっと傷ついたような顔を思い出すと、胸のなかがもやっとしてしまう。
それはそれとして、あの場面を笑われるのは判らないでもないが、羨ましいって、どういうことだろう？
「わたし、兄弟がいないからケンカとかしたことないんです。おじいちゃんは優しいから叱られたことないし。お父さんと、お母さんとはあんまり一緒にいられないから……」
ティータの両親は二人とも導力技術者で、ずっと外国に行っているのだとそのとき初めて聞いたのだ。導力器の普及していない処で技術指導をしていて、年に一度くらいしか戻ってこないのだと

言った。
「そうだったんだ……」
「でも、おじいちゃんが居てくれるから寂しくはないです。中央工房の人たちもみんな親切でいい人ばかりだし。ただ、エステルさんとヨシュアさんを見ていると、ちょっとうらやましいなって……」
「ティータちゃん……」
「えへへ」
「……じゃ、じゃあさ、あたしがティータちゃんのお姉さんになってあげる！　ちなみにヨシュアはお兄さんってことで」
「ふえっ⁉」
「ヨシュアにも言っとくから。これから、あたしたちのことは『さん』付けはナシね。代わりにあたしたちも呼び捨てにさせてもらうから。ね、ティータちゃ――ティータ」
「ふぇぇ、あのその」
「ほらほら、呼び捨てていいから」
「エ…………………エステルお姉ちゃん」
「はいはい。ほら、ヨシュアも同じ調子で！」
「ヨシュア……お兄ちゃん。えと、こうですか？」
「そうそう！　これからもよろしくね、ティータ」

「はい、エステルお姉ちゃん！」
ティータの呼び方がエステルにはちょっとくすぐったい。そういえば、と思い出す。ヨシュアは何故か自分のことを『お姉ちゃん』とは呼んでくれなかった。最初から生意気なことに『エステル』だった。父がヨシュアを連れ帰ったときには、まだエステルとさほど変わらない背丈の男の子だったのに。ちっとも弟らしくなかった。
そう、ヨシュアは子どものときから落ち着いていたし、弟のくせに自分がエステルの面倒を見ているかのように振る舞うことが多かった。
小さい頃から生意気だったのだ。
それでも昔はあんなにたくましくなんてなかったから、可愛い弟だと思っていた。いつのまにか胸だって厚くなってて、腕だって太くなってて、あれじゃまるで弟じゃなくて――。
「エステルさ――お姉ちゃん？」
「ん？　……ああ、なに？　ティータ？」
「ご飯だって、さっきから呼ばれてるみたいです、けど」
見れば、とっくにドロシーの姿は消えている。
（うわわ、あたし、何を考えてた！）
部屋に戻ってみると、夕食が運ばれてきていた。
テーブルの上の料理を見て、エステルとティータは思わず歓声を上げてしまう。
大きな魚が一匹まるごと皿の上に載っているのを始めとして、見た目にも鮮やかな料理の数々が

テーブルの上いっぱいに並んでいた。山菜を使った品が多いように見える。東方風の旅館であることと関係あるのだろうか。
先に席についていたヨシュアの顔を見て、ちょっとだけうろたえてしまったけれど、ヨシュアがいつも通りの応対をしてくれたので、エステルもすぐにふつうに接することができた。
そう、いつも通りに……。
魚料理に舌鼓を打ちつつも、エステルは露天風呂での出来事と、言い合いをしてしまったときのヨシュアのちょっと沈んだ顔を何度も思い出してしまった。

† † †

翌朝早く、エステルとヨシュアは、ドロシー、ティータと共にツァイスへの帰路についた。
「いや～、ばっちり、リフレッシュしちゃったわね」
エステルは青空に向かって伸びをする。いつもより体が軽い。ここのところずっと歩き詰め戦い詰めのうえ、謎めいた事件を追って頭も使いっぱなしだったから、そうとう疲れが溜まっていたらしい。けれどエルモ村の湯で心身ともにすっきりだ。
「やはり温泉はやみつきになりますね～」
ドロシーの言葉にエステルは頷いた。出発前にも温泉にはもう一度だけ入らせてもらったくらいだ。

「あんまりゆっくり入ってるから、出発を忘れたかと思ったけどね」
「お、おおげさねぇ、ヨシュアってば」
「ティーちゃんはエルモ村には何度も来ているんですよねぇ。うらやましいよう」
ドロシーが傍らを歩くティータを妙な略し方をして呼んだ。愛称――のつもりだろうか。
「ティーちゃん……わ、わたしのことですか？」
「『ティータちゃん』って、なんか呼びにくいんだもん。だめかなぁ？」
「あ、えと。ううん、別にいーですよ」
いいと言いつつも、ティータのおでこのあたりに汗が浮かんでいるような。
「ありがと、ティーちゃん」
そう言ってドロシーがにっこりと微笑んだ。ほんとうに自分のペースを崩さない人だ。
歩きながらでもドロシーは時々立ち止まっては鞄から出したカメラを構えてあちこちの風景を撮ろうとする。
さすがはカメラマンというべきか――。
急ぐ旅でもないので、エステルたちも足並みを揃えつつ歩いていた。帰る頃には博士の解析が終わっているといいのだけれど……。昼過ぎにはツァイスに戻れるはずだ。
青い空のなか、綿菓子みたいな雲がいくつか浮いている。良いお天気だった。
雲を眺めていたドロシーが言う。
「そういえば、このトラット平原ってヒツジンっていう魔獣が出るんだよねー」

「ヒツジン？」
「うん。二本足で立って歩く——どころか、格闘技までこなすという羊そっくりの魔獣なんだよ。ほら、あんな感じの」
言いながらドロシーが青空を指さした。
縦に長い雲がぽかりと浮いている。羊雲だ。魔獣には見えない。
「……ごめん。さっぱり判らない」
カメラマンの目にはあのぽわぽわした雲がどうやらヒツジンという魔獣に見えるらしい。
「えー？　ほらほら、見えるってば。可愛いですよう」
「ドロシーってば、魔獣に食べられそうになってたくせに懲りないわねー」
「いえいえ懲りていますってば。あのワンちゃんたちに食べられそうになったのは、わたしのカメラマン人生に大いなる転換をもたらしました！」
おおげさな身振りで言うのだ。
「やはり食べられる前に、美味しいものを食べ尽くしておくべきだと！」
「それ、懲りてない！」
思わず大声で突っ込んでしまった。
隣でティータがくすくすと笑っていた。
形を変えつつ雲はゆっくりと流れてゆき、太陽はしずしずと青空を昇ってゆく。
平原の道が北へと向きを変え、ツァイスの近くの三叉路に差しかかったときだった。

「おお、ちょうど良かったぜ。あんたたち！」
声を掛けられた。ツァイスへ向かう道とは異なるほう、東から伸びて繋がっている道の上を熊のように大きな男が歩いてくる。
三叉路のところでエステルたちも足を止めた。男は、がっしりとした身体に東方風の衣服——武闘着にも見える——を羽織っていた。武闘家のようだ。エステルよりも頭一つ背が高かった。横幅も倍くらいありそう。年齢は三十歳ほどだろうか。髪も目も茶色くて、そこもなんだか熊っぽい。
「よう、お嬢さんがた。ちょいと聞きたいんだが……エルモ村に行く道を知ってるか？」
気さくなしゃべり方をする大男だった。
「それなら、あたしたちの来たこの道を行けば——」
いま自分たちが歩いて来た道だとエステルが答えると、大男は丁寧に礼を言って歩き去ろうとした。
不意に振り返る。
「なぁ、おまえさんたち、その格好からすると。ああ、いやいい。大したことじゃあないんだ。呼び止めて済まなかった。またな」
そう言葉を濁し、大男は街道を南へ、エルモ村へと歩き去る。
飄々とした人物だ。ただエステルの見立てでは、かなりの武術の腕を持っている。
背中を見送りながらヨシュアが言う。
「東方風の服装だったけど、やっぱり外国から来たのかな」

その問いに答えたのはドロシーだった。
「うん。きっとそーだと思うよ。あの人が来た方向には《ヴォルフ砦》があるから」
「ヴォルフ砦？」
「えっと……、国境の近くにある関所でね。正面に大きな門があるの」
「国境というと……東の《カルバード共和国》か」
「ハーケン門と同じような場所ってわけね」
エステルは頭のなかで地図を広げてなんとなく理解した。カルバード共和国は、リベール王国から見て東にある国だ。ヴォルフ砦の関所の向こうがカルバード共和国になるのだろう。
昼少し前にツァイスの街が見えてくる。
熊のような大男と出会った以外はエステルたちには何事もなく過ぎた旅だった。けれど、街ではすでに事件が起こっていたのだ。
中央工房を目指して歩きだしたエステルたちは、すぐに異変に気づかされる。
自動階段の向こうに聳（そび）える巨大な工房から白い煙が上がっていた。

† † †

騒然としている街の人々の間を駆け抜け、エステルたちは導力階段を駆け昇る。
空へと伸びている工房のあらゆるところからモクモクと煙が噴き出ていた。
（いったい、何がどうなっちゃってるの⁉）
玄関前に見知った人物を見つけ、エステルたちは駆け寄った。
「工房長さん！」
「おお、エステルくん、ヨシュアくん、それとティータ。エルモから戻ってきたか。うん？　君は……」
ドロシーを見て訝しそうな顔をする工房長に手早く紹介を済ませてから、エステルは何が起こっているのか尋ねた。
どうやら建物内部で何かのガスが発生したらしい。地下から五階まで煙まみれ。消火装置が作動してないので火事ではないはずだが、どこからなぜ、煙が出ているのかまったく見当がつかない、という。
「あ、あの、工房長さん。おじいちゃんはどこですか？」
心配そうにティータが尋ねる。
「おや、そのあたりに……ヘイゼル君。確認したんじゃないのかね？」
「そ、それが、職員は全員確認しましたが、ラッセル博士の退去はまだ……」
「なんだって！　まだ、なかに残っているのか⁉」
その言葉を聞いて、エステルは反射的に口にしていた。
「工房長さん！　あたしたちに任せて！」
「僕たちが様子を見てきます」

　ヨシュアがすかさず言葉を添えてくれる。
「君たち……。うむ。す、すまない。よろしくお願いする」
　一瞬、エステルたちを心配そうに見つめた工房長だったが、エステルたちが胸に付けている遊撃士の証を見つめると、一つ頷いて頭を下げた。
　エステルたちはきびすを返した。玄関のほうへと向かおうとする。
「わ、わたしも行く……！」
「えっ……」
　振り返ると、声の主はティータだった。
「中央工房のなかなら色々と知っているから。お姉ちゃんたちをちゃんと案内できる、から」
　そう言って、ティータはエステルを見つめてくる。
　エステルが考えを巡らせたのは一瞬だった。確かにエステルとヨシュアでは、中央工房のなかがどうなっているのかさっぱり判らない。道案内は必要だろう。
「ティータ……。わかった、一緒に来て」
「あ、あの〜。わたしもついていっちゃ……」
　ついでに、ドロシーまでおずおずと手を上げて主張してきたが——。
「だめ」
「あう、即答……」
　ドロシーの目的が取材なのは明らかだったからきっぱり断る。それに、何か危険な事態が進行し

ていないとも限らない。ティータを守りつつドロシーまで、となると、さすがに手に余る。
「はあ。仕方ないかぁ。くれぐれも気をつけてね？」
「判ってる！」
　ドロシーが心配してくれているのは確かだったから安心させるように言った。
　エステルとヨシュアはティータを伴い中央工房へと踏み込む。
　入るやいなや左右に目を配り、人の気配を感じ取ろうとする。だが、すぐの大広間(ロビー)には、もう誰もいないようだった。煙の比較的薄い床近くを姿勢を低くして進む。
「おじいちゃん、研究に熱中すると周りが見えなくなっちゃうから……」
　だから、博士はまだ三階の工作室にいるかも、とティータが言う。普通の人ならば、これだけの騒ぎに気づかないでいるとは思えないが……。
（あの博士なら、ありそうよね。三階か……）
　とりあえず来たときのように昇降機で上の階にあがらないといけない。大広間の左手を目指して進むうちにエステルは気づく。
「あれ？　あんまり息苦しくないような……」
「このモヤは……多分、撹乱用の煙幕だと思う」
「へっ？」
　かくらんようのえんまく？　エステルは頭のなかでヨシュアの言った言葉をオウム返しに繰り返してしまった。一瞬、言っている言葉の意味が取れなかったのだ。

つまり、この煙は発煙筒か何かで焚かれたもの、ということになるわけだ。どうしてそんな煙幕を張る必要があるのか？　それにそうなるとこの騒ぎは事故ではなく、人為的に起こされたということになる。誰か煙幕を張った者がいるはずなのだ。

（嫌な予感がする）

昇降機は停止していた。

「どうしよう。これじゃ上に行けないじゃない！」

「階段があります。こっちです！」

ティータに言われて大広間に戻る。建物の反対側にある非常階段を使った。そんなところに階段があるなんて、ティータがいなければ気づかなかっただろう。

三階まで辿りつく。相変わらず廊下は煙でいっぱいだ。

工作室の前まで来ると扉の向こうから内燃機関の動く音がした。機械が動いているということは、ここで博士が作業を続けているということだ。

「おじいちゃん、大変だよ！」

ティータが工作室のドアを開けた。エステルたちも続いてなかに入る。

だが——。

「……誰もいない？」

工作室には誰もいなかった。丸ノコが回っているだけで、博士の姿はどこにもない。

「と、とりあえず、機械を止めなくっちゃ」

ティータが内燃機関を停止させる。

丸ノコが停止した台を見つめてヨシュアが眉を寄せた。

「博士もそうだけど……。《黒の導力器》も見当たらない。これは……」

「なにか気づいたの？」

「うん……」

「フン、ここにいやがったか」

ヨシュアが口を開こうとしたとき、扉の向こうから声があがった。

（この声って……！）

聞き覚えのある声に慌てて振り向く。

赤い髪の男が部屋に入ってきた。背中には巨大な長剣を背負っている。

「ア、アガット!?」

赤い髪の遊撃士——《重剣》のアガットだった。

アガットはエステルたちをジロリと見渡して口を開いた。

「またお前らに先を越されるとはな。ったく、半人前のクセに、あちこち首突っ込みすぎなんだよ」

「な、なによ！　あいかわらずハラ立つわねぇ！」

先輩遊撃士だろうが、父の知り合いだろうが、ここまで失礼な言われ方をされる覚えはエステルにはない。

「あの……お姉ちゃんたちの知り合い？」

目つきの悪い——もとい、眼差し鋭いアガットに、背中に隠れていたティータが少し怯えた瞳になって訊いてくる。アガットは、そこでようやくティータがいることに気づいたようだった。
「おい、ちょっと待て……。どうしてガキがこんなところにいやがる?」
「ひっ」
アガットに鋭い視線を向けられ、ティータがびくりと身体を竦めた。
「ちょ、ちょっと！　なに女の子を脅かしてんの⁉」
エステルは黙っていられずに言い返した。ヨシュアがティータをかばうように間に入る。
チッ、とアガットが舌打ちした。
「言いたいことは山ほどあるが後回しにしといてやる。それで、一体どうなってるんだ?」
たしかに、とエステルも頭を冷やす。言い争いをしている場合ではない。エステルたちは、この部屋にいるはずの博士が行方不明であることを告げた。
「で、まだ探してねえのは、どっちだ?」
「えと……あたしたちは階段のほうから来たのよね」
「俺もだ」
「ということは残るは昇降機のほうですね。止まっているはずですが……」
「念のためだ。案内しろ、行くぞ」
さっさと部屋を出ていくアガットを見て、エステルたちは慌てて後を追う。
昇降機に行くまでの通路で、不自然に扉が開いている部屋があった。

「ティータ、あそこ、なに?」
「あそこは演算室っていって、《カペル》が置いてある部屋です」
「《カペル》?」
「おじいちゃんの発明した大陸最高の情報処理速度をもつ演算器です。《核(コア)》の部分はこれっくらいの大きさなんですけど、動かすのに、すっごい大量の導力が必要なんです。中央工房がこんなに大きいのは、《カペル》を動かすのに必要な導力を手に入れるためなんですよ」
これくらいと言いながら、両の掌を合わせていた。ティータの両手に乗るくらいの大きさ、ということだろう。そんな小さな機械なのに、動かすために中央工房ほどの大きさの導力発生装置が必要だとティータは言うのだ。
「導力器の開発とか実験にもすっごく大切な演算器なんですけど……」
「しっ！」
説明を続けようとしたティータの口をエステルはとっさに手で押さえて封じていた。そのまま自分も口をつぐむ。ヨシュアとアガットも厳しい顔で通路の奥を睨んでいる。
煙の向こう、昇降機のほうから複数の声が聞こえてきたのだ。
ティータも気づいたようだ。目を瞠っている。今この建物にいるのは、自分たちと博士を除けば——この騒ぎを起こした奴らだろう。攪乱用の煙幕を焚いた奴ら。
「行くぞ！」
真っ先に駆け出したのはアガットだった。エステルたちも後に続く。

「――いた！」
白煙は収まりつつあり、見通しの良くなった廊下の奥、昇降機の手前に頭衣（フード）で顔を隠した黒装束の男たちがいた。それだけではない。
「お、おじいちゃん⁉　《カペル》⁉」
男たちのひとりが博士を抱えていた。ラッセル博士はぐったりしており、気絶しているように見える。別の男は小さな導力器を小脇に抱えていた。《黒の導力器》だ。そして男たちに命令を発していたボスらしき奴が手に卵型の何かを持っていた。
（あれが――《カペル》）
向こうも駆けてくるエステルたちに気づいた。
黒装束同士が互いに目と目で合図をし合う。昇降機のなかに入ってしまった。
（動くの⁉）
ゆっくりと扉が閉まり始める。先ほどまで動かなかったはずの昇降機が――。
「ま、待ちなさいよっ！」
「逃がすか、おらあっ！」
エステルはアガットとともに昇降機に突撃をかけたが――。
届かない。
伸ばした手の先で扉が閉まってゆく。
頭衣に覆われていないその口が確かに笑みの形に歪んだ。エステルの頭がかっと熱くなる――や

られた！
まんまと遊撃士の目の前で黒装束たちは博士を誘拐し、中央工房の大切な演算器《カペル》と《黒の導力器》を盗んでみせたのだ。
頭が煮えてしまいそうなほど熱くなる。怒りという熱だ。
唸るような音を立てて昇降機が動き出した。
下の階に向かって。
一階で止まり、そこでふたたび動かなくなった。釦を押しても反応しない。
「階段で降りるぞ！」
アガットに言われるまでもない。
エステルたちは通路を取って返し、非常階段を必死に駆け下りた。
黒装束たちがあの昇降機を降りてからは、エステルたちが街にやってきたときに通った地下道か、工房の出入り口のどちらかに行くしかない。まさか逃げ場のない地下の道を進むことはないだろうと思った。
となると正面玄関のほうだ！
煙幕の煙も薄れつつあり、もはや身を隠す役には立ちそうもない。入り口あたりで上手くすれば追いつけるはず。
そう思ったのだが――。
「軍の人たちが出てきたから何があったのかと思ったよ。蒼と白の軍服を着た礼儀正しい連中だっ

たが……」
　玄関の外で待っていたマードック工房長が言った。
「女王様の親衛隊だね～。カッコ良かったから思わず写真に撮っちゃったぁ。えっ、違うの？」
　ドロシーが目を丸くしている。
「ヨシュア、これってまさか……」
「うん。昇降機のなかで着替えたんだろうね。最初から替えの服も用意していたんだろう」
　黒装束たちは、王国軍の、よりによって親衛隊に変装して脱出した、わけだ。大きな荷物を運んでいたという。博士はその偽装された荷物のなかだったのだろう。
「やりやがったな……っ！」
　工房長たちの証言を聞いたアガットが唇を噛んだ。

†　†　†

　手分けしてツァイスの町を探し回ったが、日が落ちるまで探しても、博士を掠った男たちを発見することはできなかった。
　日が、暮れてしまう。
　夜遅く、疲れ果てて支部へと戻ったエステルたちは、湖畔のレイストン要塞から王国軍の部隊がようやく駆けつけてきたと受付のキリカから聞かされた。

　発煙筒による中央工房の攪乱。
　王国随一の頭脳ラッセル博士の誘拐。
　最新技術の塊である演算器《カペル》の強奪。
　黒装束の男たちが引き起こした事態を知った王国軍大尉のカノーネは、「許されざるべき所業」と語ったということだ。
　エステルの感想はたった一つ。
　悔しい。
　またしても逃げられてしまった。だが、既に日は落ちてしまい、行方を追う手掛かりもない。
「でも、いいところに戻ってきたわ」
　キリカが言った。
「エステルさん、ヨシュアさん。お久しぶりです、お元気でしたか？」
　受付の前に立って先ほどから黙って話を聞いていた人物にエステルはようやく注意を向けた。エステルとヨシュアが来る前から、受付でキリカと話をしていた男だ。
（あれ？　このひと……どこかで見たような……）
　髪を後ろに撫でつけ、眼鏡をかけた、背が高くひょろりとした体格の男だ。
「アルバ教授じゃない」
　《翡翠の塔》の屋上で出会った考古学者だった。たった一人で古代文明の研究のために塔を昇ったのだと言っていた。あのときは、エステルたちは、記者ナイアルとドロシーの取材の護衛として

塔を昇った。エステルは憶えている。屋上でヨシュアが気分が悪くなってしまって心配したっけ。
「教授もツァイスに来てたんだ。なに？　護衛を頼みに来たの？」
答えたのはキリカだった。
「それどころじゃない。犯人たちの行方が判るかも。この人はその目撃者」
「へ……⁉」
「なんだと⁉」
アガットも驚いていた。
「うーん、やっぱりただ事じゃなかったんですね。いやはや、通報に来てよかった。実は私、ついさっきまで塔の調査をしてたんですよ」
「塔って……。例の古代文明の遺跡だっていう《四輪の塔》？」
「てぇことは、トラット平原道の北にある《紅蓮の塔》だな……。ここから半日も歩けば着くあたりだが」
アガットの目つきが鋭くなる
「ええ、夕方近くのことです。塔のなかを探索していたら、数名の軍人が入ってくるじゃないですか。最初は王国軍の調査でもあるのかと思ったんですが……。陰から様子を窺っていると、誘拐だの逃走経路だの、不穏な言葉が出てきましてねぇ。気になってしまったので、こちらに通報に来たわけなんです」
「その軍人たち、どんな軍服を着ていましたか？」

ヨシュアが尋ねた。
「ええと、蒼と白を基調にした華麗な軍服を着ていましたが……」
王国軍親衛隊の軍服だった。アガットが胸の前で手のひらに拳を打ちつけた。
「決まりだな……。《紅蓮の塔》に急ぐぞ！」
「うん！」
「わかりました！」
ここで、また逃げられるわけにはいかない。
そのとき、いままで黙っていたティータがおずおずと口を開いた。
「お姉ちゃんたち、お願い……。わ、わたしも連れていって……！」
「ティータ……」
「それは……」
ヨシュアといっしょにエステルも言い淀んでしまう。ティータの気持ちは判る。自分だって同じ状況なら同じことを言うだろう。だが工房のときとは状況が違う。
「こら、チビスケ」
アガットが低い声を出した。
ジロリと睨みつけられてティータは身をすくめる。
「ふえっ……？」
「あのな、連れていけるわけねえだろが。常識で考えろや、常識で」

「で、でもでも……！　おじいちゃんがさらわれたのに、わたし……わたし……！」
「時間がねえからハッキリ言っておくぞ……。足手まといだ、ついてくんな」
「……っ！」
「ちょ、ちょっと！　少しは言い方ってもんが……」
「黙ってろ。てめえだって判ってるはずだ。シロウトの、しかもガキの面倒見てる余裕なんざねえんだよ」
「そ、それは……。ねえヨシュア、何か言ってよ！」
「エステル……。残念だけど僕も反対だ。あの抜け目ない連中が追撃を予想してないわけがない。そんな危険な場所にティータを連れていくわけにはいかないよ」
「ヨ、ヨシュアお兄ちゃん……」
　ティータの瞳が泣きそうに歪む。味方を探して、その視線がエステルのほうへ向く。
「う〜っ……。ごめん、ティータ。やっぱ連れていけないみたい……」
「エ、エステルお姉ちゃん……」
　ティータはうつむいた。小さな手が服の裾を強く握りしめる。ぽたぽたと雫が落ちた。
「ひどい……。ひどいよぉっ」
　そう叫んで、支部を飛び出していってしまった。
「ティータ！」
　エステルの伸ばした手は虚しく宙を切った。引き留められる言葉が見つけられない。

　肩を叩かれる。ヨシュアだ。
「今はそっとしておこう。一刻も早く博士を助けて彼女を安心させてあげるんだ」
「そうよね……。行くわよ、《紅蓮の塔》に！」
　決意を新たにエステルは拳を固く握りしめた。
「ったく、余計な時間を取らせやがって。キリカ。王国軍への連絡は任せたぞ」
「ええ。そちらも武運を」
「どうやら大変なことが起こっているようですね……。くれぐれもお気をつけて」
　アルバ教授の声を背中で聞きながら、エステルたち三人は遊撃士協会支部を飛び出した。
（ティータ、待ってて。必ず博士は助けてくるからね！）



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.122

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



1名様

『イースIX Monstrum nox』タペストリー

さがら梨々先生による描き下ろしイラストの『イースIX -Monstrum NOX-』店頭用特大タペストリーを1名にプレゼント！

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.122プレゼント係
1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→（記事一覧から１つずつ）
3：アンケート① ファルコム作品に初めて触れたのは
　いつですか？
　アンケート② ファルコムマガジンに初めて触れたのは
　いつですか？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：ファルコム40周年&ファルマガ10周年記念
　近藤社長インタビュー &ファルマガ作家コメント
2：黎の軌跡最新情報
3：も～っと集まれ！ファルコム学園
4：創の軌跡　THE MISERABLE SINNERS
5：英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～
6：ファルコムニュース
7：暁の軌跡最新情報
8：英雄伝説 空の軌跡

応募締め切り　4月28日（水）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。